

---

# 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士

オンドゥル侍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士

### 【Nコード】

N1608W

### 【作者名】

オンドウル侍

### 【あらすじ】

民間軍事会社リトルウイングに所属する青年「アレン・クラウド」はある日家の中で一つのカードデッキを拾う。そして彼は、鏡の向こうの世界「ベントラ」の事、そこを征服し次にグラールを狙う「ゼビアクス將軍」の事を知る。大切な人が繋ぎ、守ってきたグラールをゼビアクスの魔の手から守るため、アレンは「仮面ライダードラゴンナイト」となり、ベントラの戦士「レン」と共に戦う事を決意する。

原作のストーリー沿いに行きつつ、所々改変をくわえてお送りいた

します。

## 世界観説明

### グラール太陽系

母なる太陽と、3つの可住惑星からなる太陽系。太陽の名が『グラール』であると考えるのが自然だが、太陽系そのものをグラールと言う事が多い。SEED襲来のすぐあとにイルミナスが本格的に活動し、その脅威がさつたと思えば旧文明人の罠によって危機に陥り、それを退けた直後にダークファルスが復活、さらにそれを凌いだと思えばゼイビアックスによる侵略など、とにかく事件に事欠かない。

### ベンタラ

グラールと鏡映しになっているパラレルワールドで、レンの故郷。そのため同じDNAを持つ人間が、グラールとベンタラに1人ずつ存在する。ゼイビアックスによって住人が拉致されたため、現在は無人。

### カーシュ

ユートが生まれ育った少数民族ではなく、ゼイビアックスの母星。北軍と南軍に分かれての長きにわたる戦争で荒廃し、その再建に使うための労働力としてさらわれたベンタラの住人が使われている。

### リトルウイング

アレンが所属する民間軍事会社。規模は小さいが基本的にどんな仕事でも受けるのがウリ。亜空間事件を乗り切ったからは顧客もかなり増えたらしい。頻発する行方不明事件の調査を進めるが、モン

スターとの関連にまでは気付いていない。

## ガーディアンズ

警察権を与えられた『民間警護会社』の中でも最大規模の組織。モンスターと行方不明事件の関連にいち早く気付いており、極秘調査を進めるための機関も設立されたというつわさもある。

## 仮面ライダー

アドベントマスターことユーブロンが、ベントラを守るために力シユの技術を用いて開発した特殊強化戦闘システムおよびその使用者。全部で12が存在し、それに加えてユーブロン自らが変身したプロトタイプライダーを加えた13人で戦ってきた。ドラゴンナイト、ウイングナイト、アドベントマスターを除いたすべてのデッキはゼイビアクスの手に渡ったと考えられる。

## アドベントビースト

アドベントマスターが作り出したモンスターで、ライダーと契約をかわし力を与える存在。必ずそうしなければならない訳ではないが、倒したモンスターのエネルギーを与える事で強化することが可能。

## モンスター

ゼイビアクスが作り出した戦闘用の人工生物で、人間を拉致して要塞まで運ぶのが主な役目。ライダーと契約を交わすことは不可能。アドベントマスターはこれをもとにアドベントビーストを作り出したものと考えられる。

## ベント

ライダーが敗北すると発動する機能。規定値を超えるダメージを受けると、そのライダーの意思を問わずに、二つの世界の狭間にある『アドベント空間』に強制転移する。アメリカでは放送コードが厳しく原作の様にライダーを死なせる事が出来ないため取り入れられた。

## アドベント空間

ベントされたライダーが転送される先で、アドベントマスターが作り出した。元々は傷付き倒れたライダーを隔離し、後で回収するシエルター的な場所だったが、唯一アドベント空間と現実世界を行き来できるアドベントマスターが行方不明になったため、牢獄同然の場所となってしまうた。

## デイメンジョンホール

グラールとベントラを隔てるトンネルの様な物。アドベントサイクルはここに用意されている。

## プロローグ

夜の駐車場。その女性は少し急いでいた。自分の車に向けて足早に歩いて行く。そこには事務所にいる管理人と彼女以外誰もいない。……周りの光景を反射して映している黒い車体から、彼女を見つめる異質な視線を除けばだが。

「きゃあ！」

突如、その女性が現れた何者か後ろから押さえられる。管理人はと言えば、よからぬことをされそうになっていると勘違いし、読んでいる雑誌越しに時々眼をやるだけ。

人の様に四肢が生えてはいるが、顔の無い赤い体。背中に背負った巨大手裏剣。首元のコード。どう見ても、人間ではない。それが鏡から現れて、彼女を引きずりこもうとする。

と、その時だった。突然飛び出した1台のバイクが女性をかわして赤い怪物だけをね飛ばし、少しは知ってから急停車する。

黒い車体のバイクだ。従来のホイールバイクと少し違った変わったデザインだが、乗っている男に比べれば大したことは無い。

蝙蝠の様な鎧。腰に巻いた銀のベルトとそこから下がったレイピア。

さつき撥ね飛ばした怪物が起き上がり、鏡の中から増援も現れる。数的にざっと15くらいか。男はレイピアを抜き放ち、勇躍怪物に跳びかかった。

流れるような剣技は怪物に攻撃の隙を与えない。しかしこの数が相手では少し無理がある。男はレイピアを納めるとベルトのバックルに手を伸ばし、1枚のカードを引き抜いてレイピアに取り付けられた器具に挿入した。

『SWORD VENT』

突如飛来した蝙蝠から男の手に、黒い槍が飛び込む。その槍を無理かざし、男は再び怪物たちに向かっていった。

一撃の威力はさつきとはけた違いに重い。横に薙ぎ払った一撃に怪物のほとんどが斬り伏せられる。続けて1撃。2撃。その怪物は地面に倒れ伏すと、突然跡形もなく消え去った。

「…大丈夫か？」

「え、ええ…」

男は女性を助け起こし、バイクの辺りまで来るとそこで立ち止まった。管理人はと言えば、電話の受話器を握りしめている。

と、管理人は自分の目を疑った。男の体を囲うようにして一つのリングが浮かび、その姿が変わったのだ。サングラスを掛け、革のジャケットを着た男だ。見た目から、歳はざっと20代後半と言ったところか。その男はバイクに跨り、ヘルメットをかぶると夜の街に消えていった。

「……マジかよ。」

管理人はそう呟き、事務所に足を向けた。

バイクに乗って走る男の頭に、共鳴ともつかない音が響く。その男は前を見据え、言い放った。

「KAMEN RIDER！」



## プロローグ（後書き）

原作第1話の最初の方のシーンです。丸ッぽそのまんまですが第2話からはちゃんとオリジナルシーンとかも出てきます。

## 第一話 鏡の向こう／前編

「よっしゃあ！また勝った！」

「ああんもう！何で勝てないのよ！」

リゾート型コロニー、クラッド6。その居住区のある部屋でカードゲームに興じる二人組がいた。

アレン・クラウドとエミリア・パーシバルである。ただの仕事仲間：よりはお互いに親しいが、それでも恋人とかいう仲ではない。

「ま、天性の才能ってやつかな？」

次の瞬間、アレンの頭上には幾つか星が舞っていた。ちなみに目の前にはいらだたしげに拳を構えるエミリア。

「ちょ・う・し・に・の・る・な！」

「ずびばせん。」

アレンが顔を推さえながら立ち上がる。

「……じゃ、あたしもう帰らせてもらっわ。」

「おう。じゃあな。」

と、エミリアが部屋を出たのを見届けた直後、ふとベッドのわきに目をやったアレンは、そこに見慣れないものが置いてあるのを見つけた。

「……カードデッキ？」

シンプルな黒く薄いケースに収められた数枚のカードだ。ためしに一枚ぬいてみた。『CONTRACT』と書かれている。イラストでは灰色のバックで何かが動いている。ウラを返してみると、始めてみる名前があった。

「……アドベントカード？」

アレンはカードゲームに詳しくだったが、こんなカードは見たことが無い。買った覚えなどもちろん無かった。

何となくベランダに出て、カードデッキを人工太陽の光にかざしてみる。やはり、書いてある事は変わらない。と、ふと目の前を見

たアレンは、そこに妙な物を見た。

彼の部屋はベランダ付きで、そこから繁華街が一望できるようになっていた。向かいには大きなオフィスビルがあり、窓は太陽を反射して巨大な鏡のようだった。その表面がさざ波だっている。

「？」

と、その波紋の中央から突然何か飛び出してきた。

赤いドラゴンだった。それが、咆哮を挙げてアレンの方に向かってきた。

「うわぁ！」

両手で顔を庇うと、持っていたカードデッキから光の壁の様なものが現れ、アレンを守ってくれた。弾かれたドラゴンはそのまま壁面に舞い戻り、その中へと消えた。

「……なんだ？」

アレンは街に出ていた。何故かそうしなければいけない気がした。

しばらくして、アレンは裏路地を歩くエミリアを見つけた。別に怪しくは思わなかった。その路地は彼女の行きつけの床屋への近道だった。最近髪が伸びたと言っていたから、切りに行くのだろう。そう思ったその時だった。道のわきに捨て置かれた古いテレビの画面から、何かが這い出てきたのだ。赤い、人型の何かだ。それも2、3体はいる。

「お、オイ！」

エミリアがアレンの方向を振り返る。

「お、お前ら…その…あ、あっちへ行け！」

エミリアの視界には明らかにその怪物が入っていたが、気にも止めようとしない。それどころか、不思議そうな顔をしてアレンに声をかけた。

「あ、アレン。…ってか誰と話してるの？」

間違いない。エミリアにはこいつらが見えていない。

「え、お前、見えないのか…ってか逃げる！ここは危ない！」

「え？あ、う、うん…」

エミリアが、まるでわけがわからないと言った顔で路地の向こうに駆けて行った。それを見届けてから、アレンは怪物を見据えた。

街中で武器を振り回す訳にはいかない。素手で戦うしかないだろう。

「さあ…きやがれ…」

「オ、オオオオオツ！」

怪物 正確にはレッドミニオンと言うが はアレンに襲いかかった。叩き込まれた拳はかなりの威力だったが、アレンは慣れた動きでかわし、首筋に手刀を叩き込んだ。レッドミニオンはよろめきはしたが、それほど大きなダメージは受けていない。

「チイツ！」

反対側から飛びかかってきたレッドミニオンを組みふせ、近くの本箱目掛けて投げ飛ばす。そのレッドミニオンは壁に叩きつけられたが、やはり起き上がってきた。

と、アレンの後ろから、もう1体が迫ってきた。後ろからのサイドキックを受け、続けざまの重い拳がアレンの体をはね飛ばす。

「ぐああ！」

と、その時だった。

「きやああ！…！」

エミリアが、いつの間にもやら出てきたもう1体に抑え込まれ、近くにあった鏡の方に引きずられていった。抵抗はしているが、ほぼ無駄だった。

「エミリアアアア！！」

アレンは叫んだが、どうにもならなかった。エミリアは鏡に引きずり込まれ怪物もろとも消えていった。

「エミリア…ウソだろ…」

次の瞬間、レッドミニオンが1体、鏡の中から叩きだされるように出てきた。そしてその次に出てきたのは、エミリアを抱きかかえたサングラスの男だった。

男はエミリアを下ろすと、黙ってレッドミニオンを見据える。

「ア、アアアアア！」

レッドミニオンは襲いかかったが、明らかに男が優勢だった。続けざまに拳やキックを叩き込まれた1体が、霧の様に消滅する。続いてもう1体、もう1体。

最後のレッドミニオンを壁に蹴り飛ばして消滅させると、男はアレンに近付いてきた。

「スゲえじゃんあんた！なに？格闘家か何か？」

しかし、男はアレンの言葉など無視した。

「カードデッキをよこせ。」

「え？何のこと？」

「そのままの意味だ！俺に渡せ！」

アレンは男から走って逃げ去った。あんなのの相手をするのは御免だ。

それから少しして、アレンはとあるブティックの前に来ていた。ふとそのショーウィンドウを除くと、彼は思わず目をこすった。

ショーウィンドウの内側、いや、ショーウィンドウに使われているトランスパリスチールの中に、何か這っている。

蜘蛛だ。でかい蜘蛛だ。

と、突然その蜘蛛の足が壁面から出てくる。

「うわあっ！」

驚いたアレンはそのまま背中を後ろの車にぶつけた。と、次の瞬間、彼の体は見えなくなっていた。

銀色のトンネルの様な空間。そこをアレンは飛んでいた。と、その体が光に包まれる。そのまま、アレンは飛んで行った。

サングラスの男は、アレンが消えたショーウィンドーまで来ていた。彼はすぐに事態を飲み込んだ。落ち着き払って懐から何かを取り出す。

カードデッキだった。蝙蝠のレリーフが刻まれた紺色のカードデッキ。それをショーウィンドウにかざす。と、カードデッキから青い電光が男の腰に伝わり、銀色のベルトの様なものを形成する。バックル中央にはカードデッキと同じくらいの空間がある。

「KAMEN RIDER！」

男はそう言って、バックルにカードデッキをスライド挿入した。上下の固定器具の様なものが閉じ、カードデッキが縦に激しく回転する。

次の瞬間、男の体を囲うように青いリングが2本重なって出現した。それがそれぞれ反対の方向に回転してから消滅すると、男の姿は変わっていた。

鎧だ。蝙蝠の様な鎧を着、腰には蝙蝠をかたどったレイピアを下げている。そのレイピアを引き抜き、男は壁面に消えていった。

## 第一話 鏡の向こう／前編（後書き）

### 次回予告

わけもわからぬまま鏡の向こうに飛ばされたアレンは、そこで巨大モンスター「デイスパイダー」に遭遇。逃げるだけのアレンを助けたのは、蝙蝠の様な剣士だった。彼の正体とはいったい？そしてアレンを襲撃したドラゴンとは？

次回、仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『鏡の向こう／後編』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第2話 鏡の向こう／後編

誰もいない屋外の駐車場。そこに停まった1台の車の車体から、突然出てきた人間がいた。

アレンだった。

地面にぶつけた体を確かめようとして、アレンは自分が妙な格好をしていることに気付いた。

黒と灰色の鎧だ。左手には白い手甲の様なものが取り付けられ、頭もヘルメットの様な物で覆われている。

「え？何これ？」

と、目の前に気配を感じて顔を上げたアレンは、さっきの怪物が正面にいることに気付いた。

「わあっ！」

走って逃げようとしたが、バケモノ蜘蛛の方が早かった。横殴りの一撃を受け、アレンの体が横つとびに吹っ飛ぶ。

壁に叩きつけられたが、思ったより痛くなかった。この鎧のおかげだろうか。どっちにしろ、今は逃げる手段を見つけるのが先決だ。しかし、蜘蛛は思った以上に素早かった。もうアレンとの距離を詰め、じりじりと迫ってきている。

とその時だった。突然飛び出してきた何かが、蜘蛛をはね飛ばした。

それは、弾丸とVRシミュレーターのシートを足して2で割ったようなホイールバイクだった。そのキャノピーが開き、中からレイピアを下げた鎧の男が出てきた。

「あ、ありがと。助かったよ。」

だが。

「…俺にデツキを渡さないからだ。」

「あんたかよ…」

その声は、さっきのサングラスの男だった。男は腰のレイピア





だけで折れるなど、耐久性が無いにもほどがある。すぐに返り討ち  
にあい、アレンの体が後ろに飛ぶ。

「うわあっ!」

「邪魔をするな!」

男はウイングランサーで飛んでくるアレンを弾き飛ばすと、もう1  
枚カードを読み込んだ。

『ATTACK VENT』

と、さっきウイングランサーを呼び出したときに出てきた蝙蝠が飛  
来し、蜘蛛に体当たりを浴びせた。牽制くらいにしかなくていない  
が、それで十分だったらしい。男はその隙に3枚目を差し込む。

『FINAL VENT』

電子音声が鳴るが早いか、男はウイングランサーを構えて助走を  
つける。その背中にさっきの蝙蝠　ダークウイングが合体し、そ  
の体が空に舞い上がったかと思うと、ウイングランサーを下に構え  
て蜘蛛に突っ込んでいった。ダークウイングがマントに変形して体  
に巻きつき、漆黒のドリルのような姿で蜘蛛に突撃した。次の瞬間、  
蜘蛛はバラバラに吹っ飛び、破片が四散する。

「ちよつとまで。アンタ誰だ?そこに:ここはどこだ?」

しかし男はアレンの問いには答えようとしなかった。

「すぐにここを出るぞ。」

「え?」

とその時だった。

「危ない!」

男がアレンを押しつけ、次の瞬間、さっきまでアレンと男が立っ  
ていたところ　やや男よりだったが　に炎がぶつかった。

さっきのドラゴンだ。炎を吐きながらこつちに突っ込んでくる。

「逃げる!」

男はそういつつ、アレンと共に車の間を縫うように走って行った。  
ドラゴンが吐いた炎が、二人の周りを次々に爆破し、そして……

## 第2話 鏡の向こう／後編（後書き）

### 次回予告

男からこれ以上首を突っ込まないように忠告を受けるアレン。しかし、倒したはずの蜘蛛が復活を遂げ、男に危機が訪れる。そしてドラゴンと契約を交わした時、赤き戦士が鏡の世界に降り立つ…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『ドラゴンとの契約』

命をかけて、守りたいものがありますか？

### 第3話 ドラゴンとの契約

「何で僕が狙われてるんだ？」

ひとしきりドラゴンの炎をかわしてから、アレンがいらだたしげに質問した。

「説明は後だ！窓を通過して帰るぞ！」

「窓？そこから帰れるのか？」

「モノが映る物なら何でも。」

男はそう言うのと近くの窓に近寄り、そこに歩いて行った。と、そこにす込まれるようにして、男はいなくなった。

「よ、よし、俺も……」

とその時だった。ドラゴンの炎がその窓を粉々に砕く。

「う、うわああ！」

アレンは叫びながら車の間を走って行った。

「ええと、窓……窓……でなければ、モノが映るもの……」

と、不意に近くの車の黒い車体が目に入った。周りの風景が映っている。

「ええい、どうにでもなれッ！」

アレンがそこに飛び込んだ直後、最大の炎がその駐車場の地面をえぐる。

アレンはどこかの駐車場の車の車体から出てきた。さっきのブティックからは離れている。

「……わざと逃げたって思われたかな……」

一方男は、ブティックのショーウィンドウから出てきた。周りを見渡してもアレンの姿は無い。

「アイツ、何処に行った？」

『アレン…ドラゴンを恐れるな…』

アレンは夢を見ていた。響いてくるのは、1年前から行方不明になっ  
ている父親の声だった。

『契約のカードだ…』

と、アレンは目を覚ました。まだ何か違和感が残っている。こっ  
うときはバイクで走るに限る。

「つて、またあいつかよ！」

アレンの後ろから、さっきの男が黒いホイールバイクで追いか  
けてきた。すぐに裏路地にバイクを走らせる。しかし、男は執拗だ  
つた。と、表通りに出ようとしたところで、荷物を運んでいる人間が  
出てきた。慌ててブレーキを切ったおかげで衝突は免れたが。

「ゴ、ゴメン！」

「気をつける…」

突然男が横に並ぶと、アレンのバイクのキーを外して走り去っ  
ていった。

「あ、オイ何するんだ！」

「何の冗談だ？キーを返せ。」

アレンが押してきたバイクを止め、男に詰めよった。だが男は例  
によって答えない。

「カードデッキはどこだ？」

「あれで別の世界にいけるんだろ？」

男は黙ったままだった。

「契約のカードって？」

とたん、男の様子が変わった。そして、アレンに突然詰め寄って来る。

「誰からその言葉を聞いた!？」

「え?あのドラゴンは?」

「ドラゴンには関わるな!」

「どうして?」

男は足を止めると、アレンを見据えて答えた。

「あのドラゴンと契約を結べば……ベントされるぞ。」

「ベント?何のこと?」

と、その時だった。アレンの頭の中に共鳴のような音が響く。どつやら男も同じものを聞いていたようだ。

「この音は?」

「入口が開いた。誰かの身に危険が……。…来い!」

男はアレンの袖を引っ張って行った。

とあるビルの屋上で、やや太った男が空調機の修理をしていた。

と、突然目の前の金属パネルから何かが出てきて、男の腕にくっつ

いた。糸だった。

「…ん?何だ、これ…」

とその時、パネルからまた糸が出てきて、男の体を絡め取った。

「た、助けてくれえええええええええ!」

男とアレンがそこに来たのはちょうどその時だった。

「誰かああ!」

二人で男の体を抑え、思い切り後ろに引つ張る。糸を吐いてきた何かはかなりねばったが、引つ張る力に耐えきれなくなった糸が切れると、それきり何かが出てくる事は無くなった。

「その人を頼む。」

サンガラスの男はそう言うと、パネルの前に進み出て懐から取り出したカードデッキをかざした。青い電光がベルトを形成すると、すぐにデッキを差し込む。

「KAMEN RIDER!」

光が迸ってリングが回転し、男は蝙蝠のような戦士 仮面ライダーウイングナイトへと変身する。すぐにウイングナイトはパネルの中に入って行った。助けられた方の男はうめくような声を出して絶する。

アレンはそれを見ると、自分のデッキをパネルにかざして叫んだ。

「KAMEN RIDER!」

が、反応がない。

「KAMEN RIDER!」

発音を替えて行ってみるが、やはり何も起こらない。

「仮面ライダー!」

やっぱり無反応だ。

と、突然アレンの脳裏に言葉がよみがえった。

ドラゴンを恐れるな。

契約のカードだ

「契約のカード…そうか!」

アレンはデッキから「CONTRACT」のカードを抜き、陽のあたる位置に移動する。向かいのビルの壁面がさざ波だっている。

「……契約しよう……」

それに気付いたウイングナイトが叫んだ。

「よせえええええ!!」

が、蜘蛛の足に弾かれ、後ろに吹っ飛ぶ。

突如、ビルからドラゴンが飛び出してきて、アレンの体へと突っ込んできた、アレンは腕を広げ、ドラゴンが自分の体へとはいつて行くのを受け入れる。

アレンは何かの空間に立っていた。その体が、あの黒と灰色の鎧の覆われる。

と、突然カードデッキの中央に龍の頭のような紋章が浮かび上がり、頭にも同じものが。腕の手甲ブランクバイザーが、龍の頭のような装備　ドラグバイザーに代わる。

次の瞬間、鎧のカラーリングが灰色と黒から赤と黒に代わる。

ウイングナイトは苦戦していた。相手は倒したはずの蜘蛛だった。しかも、頭の上から人型の上半身が新しく生え、体自体も大きい。ミサイルの様に発射された針をウイングランサーでかわすが、横からいきなり叩きつけられた足に不覚を取られ、ビルの屋上から叩き落とされる。

「ぐあああああ!!」

地面に叩きつけられ、ウイングナイトは這いつくばった。そこに蜘蛛が降り立つ。そして、止めとばかりに針を放った。

突然、飛び出してきた何者かが針をことごとく叩き落とす。

ウイングナイトはそれがアレンだとすぐさま気付いた。明らかに





### 第3話 ドラゴンとの契約（後書き）

#### 次回予告

ドラグレッダーと契約を交わし、仮面ライダーとなったアレン。新たなモンスターの出現を察知したアレンは、赤き戦士「ドラゴンナイト」へと変身してたたかおうとするが、そこに新たなライダーが現れるのだった。

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士「ドラゴンナイト」

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第4話 ドラゴンナイト

アレンはすぐ近くの鏡の中から出てきた。さっきの戦いで思った以上に消耗していたようだ。

と、目の前を見ると、すぐ前にエミリアの顔があった。

「……………どうおあああああああ！！！！！！！！！！」

「きゃあああああああああ！！！！！！！！！！」

絶叫した拍子に、アレンの顔が後ろの鏡に突っ込んだ。

「待つて！待つて待つて待つて！まずは抜いて！その頭を鏡から抜きなさい！」

それから少しして、二人はリトルウイングの事務所にいた。

「…鏡の中に、もう一つの世界があったって事？」

「鏡って言うか、モノを映すものだな。そこに入ると、モノスゲえ早いジェット機に乗ったみたいになる。」

アレンが、鏡の向こうの世界について説明する。エミリアは実際に鏡に引きずり込まれただけあって、手間はかからずあっさり信じてくれた。

「じゃあ、あのグラスンはしょっちゅう飛んでるって事？この搭乗券で？」

エミリアはそう言って、アレンのデッキをかざした。

「そうなるだろうな。」

「……………ねえアレン。」

「何だ？」

唐突にエミリアが口を開いた。

「ひょっとしてだけど、その鏡のモンスターと、最近頻発してる失踪事件って何か関係があるんじゃないの？ほら例えば…去年からい

なくなってるあんたのお父さんとか…」  
とその時。

「アレンの親父さんについては調べは付いている。」  
振り返ると、シズルがいた。

「シズル！？いつの間にいたんだ！？」

「ずっといた。それよりほら。これを見る。」

シズルはそう言っ、持っていたラップトップ型のPCの画面をアレンとエミリアに見せた。

「これって？」

「なに、太陽系警察のサーバーに侵入しただけだ。」

確かに、シズルならそれくらい簡単にできるだろう。何せ、亜空間発生装置のパラメータ演算を一人で行ったのだから。

「見る、これって、アレンの親父さんじゃないのか？」

観ると、確かに画面には『フランク・クラウド』と父の名があつた。

「…『クラウド6在住だったが、1年前に失踪、現在でも行方は分からない。息子のアレンは民間軍事会社リトルウイングに勤務。』  
だつてさ。」

「確かにこれは父さんのだ。」

「…ねえ、ちよつとあたしの家に行かない？あたしのPCならスペースクがかなり引き上げであるからもつと深いところまで調べられるかも。」

「…なるほど、僕の出る幕はなしか。じゃ。」

「シズル？もう行くの？」

「久しぶりに君らの顔を見に來ただけだ。」

そう言っ、シズルは去っていった。

と、その時。

ヒュイイイイイイイン…フオオオオン…キイイイイイン…

アレンとエミリアの頭の中に、何かの音が響く。

「エミリア、聞こえたか？」

「うん、はつきり。何なの？」

「たぶん、招かれざる客だ。」

そう言うと、アレンは事務所を出て、すぐ近くの植物の陰にある窓の前まで来た。

「アレン、何するの？」

「ちょっと離れてる。」

アレンはそう言うと、懐からカードデッキを取り出してそれを見にかざす。赤い電光がデッキから発せられ、腰に到達して変身ベルトを形成する。

「KAMEN RIDER！」

バックルに差し込むとデッキが激しく回転し、赤いリングがウイングナイトの時の様に体の周りを回転する。そのリングが消滅すると、アレンは仮面ライダードラゴンナイトへと変身していた。

「……じゃっ。」

それだけ言って、アレンは窓の中に入って行った。

「……仮面ライダー？」

鏡の向こう。レッドミニオンが2体、女性を引きずっていく。それを率いているのは蟹の様なモンスター、ボルキャンサー。

「彼女を離せ！」

アレンに気付いたか、ボルキャンサーが振り返る。ボルキャンサーが剣を構えると同時に、アレンもカードをドラグバイザーに読み込ませる。

『SWORD VENT』

召喚されたドラグソードを振りかざし、アレンはボルキャンサーに斬りかかり、1撃、2撃と斬撃を叩き込む。が。

「なっ、堅え！」

びくともしていない。むしろアレンの腕にビリビリと衝撃が走る。

ボルキヤンサーが突然反撃の鉄を振り上げ、アレンが近くの階段の下まで吹っ飛ばされる。

と、アレンの目の前に、例の弾丸バイク　アドベントサイクルがやってきた。

「来てくれたのか？」

が、降りてきたのはウイングナイトではなかった。蟹の様なライダーだ。左腕に着いた鉄はおそらくドラグバイザーの様な召喚機だろう。

「…え？誰なんだあんた一体？」

そのライダーは黙ったままだった。

「味方なんだろ？……俺と一緒に、戦ってくれるんだ……」

とその時、蟹ライダーが鉄のついた左腕を突き出した。

「グアア！」

鉄の一撃をもろに食らい、アレンが大きくよろめく。

「何するんだ！黙ってないで何とか言えよ！」

しかし、蟹ライダーは襲いかかってきた。

「うえああ！」

突き出された鉄をドラグソードで何とか受け止めるが、そのままの体勢で後ろに追い詰められる。

「俺はアレン・クラウド！お前は！？」

「…黙って戦え。」

「ハハッ、やっと思ってくれた。よろしく。」

拘束から何とか抜けるが、後ろから突然切りつけられる。さっきのボルキヤンサーだった。ボルキヤンサーと蟹ライダー、3つの鉄がアレンに襲いかかり、ドラグソードを弾き飛ばす。しかし、アレンは落ち着いて体を縮めると、低弾道の回し蹴りでライダーの足をすくい、ボルキヤンサーの背中を踏み台にして後ろに跳躍する。

「…ま、待て……」

着地したアレンのもとに、蟹ライダーがやってきた。後ろについできたボルキヤンサーと、どこか似通った雰囲気を漂わせている。

「…モンスターと仲間なのか？」

蟹ライダーは鋏を構え、アレンに向けて突進してきた。

「ハアア!!!」

## 第4話 ドラゴンナイト（後書き）

### 次回予告

突如襲ってきた蟹の仮面ライダー、インサイザー。何とか逃げのびたアレンは、既に狙われているのだった…

次回、仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 「仮面ライダーインサイザー」

命をかけて、守りたいものがありますか？



## 第5話 / 仮面ライダーインサイザー

「ちよつと待てよ、味方じゃないのか？」

アレンの叫びも無視して、蟹男は襲いかかってきた。腕に装備されたシザースバイザーを振り回し、ボルキャンサーも再び加勢する。  
「ちいつ！」

振り下ろされた鋏をドラグソードで何とか受け止めて振り払い、くるりと一回転して蟹ライダーに刃を見舞う。続けて2撃、3撃と攻撃を加えたが、後ろからのボルキャンサーの攻撃で思い切り体勢を崩す。

アレンは剣技、特に片手剣の扱いは自信があった。相手も、クロー系の武器を持っていると考えればどうという事は無い。ただ、問題は2対1と言う事だ。ボルキャンサーは堅いし蟹ライダーの攻撃は無駄に重い。そして何より、相手がこちらと同じように武器を召喚できる可能性も高い。そうなれば、迂闊に突っ込みまくることもできない。

「待てよ、聞きたいことがあるだけなんだ！」

蟹ライダーの攻撃を必死にかわしながら聞いた。予想通り無視されたが。今まであったライダーはこんなのはわかりだ。

ボルキャンサーの鋏を受け止め、鏢迫り合いの様な状態が続く。と、蟹ライダーはシザースバイザーを開き、デッキから抜いたカードをセットして鋏を閉じた。

『STRIKE VENT』

と、蟹ライダーの腕にボルキャンサーの鋏とそっくりの武器が装備される。

「……！」

気付いた時には遅かった。アレンはその武器、シザースピンチの一撃を喰らい、盛大に吹っ飛ばされていた。蟹ライダーが挑発するように喋り、シザースピンチの鋏をガチャガチャと鳴らす。

「もう一発喰らつとくか？」

「またにするよ……」

アレンはちょうど後ろにあつた窓から脱出した。

アレンが窓から出てきてどこかへ去っていくと、物陰から男が姿を見せた。

ウイングナイトの男だった。どうやら一部始終を見ていたらしい。その男もバイクで走り去る。と、別の窓がまたもやさざなみ立ちさつきの蟹ライダーが現れて変身を解いた。

現れたのは、どこかチャラ男的な雰囲気を漂わせる若い男だった。男は首を抑えて軽くひねり、ため息をついた。

「もつと楽に稼げる方法はないのかよ……」

その男はポケットから携帯ビジフォンを取り出し、登録してある番号の一つに掛けた。

「やありッチー、いい知らせでも持つてきたか？」

どこかのオフィスで、スーツを着た男がその電話に出た。リッチーと呼ばれたチャラ男が一気に不平をこぼす。

「それどころじゃないよ。腰は痛いし頭も割れそうだ。これじゃ身が持たないね。」

「ハア……いいかりッチー、金が欲しいんだろ、嫌なら働くか？バーガーショップで。」

「バーガーショップ？そんなのやってられるか！」  
考えただけでもおぞましいと行った様に、リッチーが軽く首を振る。

「だが、生きていくためには働かないとな。約束を忘れたか？」

そう言われ、リッチーの脳裏にはある記憶がよみがえっていた。

『あのプレイは最高だったよなあ？』

『全くだよ、その後もチャンスだったけど審判がファール取りやがったおかげでゲームが台無しだ。』

荷台にバイクを積んだ大きめのホイール車に乗り、数人の男が豪華な家に向かって走っていた。運転しているのはリッチーだ。

と、リッチーは門の前にスーツ姿の男が立っていることに気付いた。車の窓から身を乗り出し、男に声をかける。

『おいそのおっさん、邪魔だからどうしてくれる？』

『……リッチー・プレストン。顧問弁護士のウォルター・コナーズだ。車から降りろ。』

『……何で？』

リッチーが問いかける。コナーズと名乗った男の答えはヤケに冷めていた。

『もつ君のじゃない。』

『ふざけるな。俺の車だ。』

リッチーが苦笑して答えるが、コナーズは表情を崩さなかった。

『家にも入れない。』

『何言ってるんだ。よく聞けよ、ここは俺の家だ！』

『正確には、君のお父さんの家だ。出て行ってほしいそつだ。君の事は聞いた。役立たずで、身の程知らずな、怠け者。』

『……当たってるじゃねえか！なあハッハッハ！』

『言えてる。』

と、リッチーがびしゃりと言い放った。

『降りろ。早く車から降りろ!』

彼の友人が全員降りると、コナースが言葉を掛けた。

『ドライブしながら話そう。』

そう言われて、リッチーはコナースの車に乗り込んだ。ストームシルバーのセダン車だ。

『お父さんは君に自力でのし上がって欲しがってる。』

『つまり、援助は一切無しって事かよ。』

冗談じゃない。そんな声でリッチーが答えた。

『まずは、己を知ることだ。』

『なんだって?』

『辛い時こそ本性が見えてくる。とにかくお父さんは君を一人前にしたいとさ。』

『いまさら冗談じゃないね。俺の欲しいものをすべて与えてきたのは親父だ。』

『確かに都合がよ過ぎるな。だが、お父さんの金だ。彼が渡したくないなら私にはどうしようもない。』

コナースの言葉は正論だった。リッチーが少し、言葉に詰まった。

『ん…アアツ! ついてねえなツ!』

車が止まり、二人はある駐車場に降りた。と、コナースが近くを指さす。そこでは、『ハンバーガー 3個で300メセタ』と書かれた看板を手にした男が音楽に乗って、時折その看板を回しながら通行人に向けていた。

『アレがなんだっていうんだ?』

『明日は我が身かもな。』

コナースはストレートに言うと、突然話題を変えてきた。

『武術の心得があるとか。』

『女の気を、引けるからな。』

コナースは少し笑うと、リッチーに言葉を掛けた。

『元の生活にも戻れるかもな。1億メセタも夢じゃない。』

『戦えばもらえるのか?』

コナーズは懐から、何かを取り出した。蟹のエンブレムが刻まれたカードデッキだった。デッキが響くような音を立てて光る。

『スゲえな。これは？』

『君の仕事道具だ。これで取引しよう。』

コナーズは車の窓を向き、額の汚れを払った。映し出された姿は人間のものではない。

そしてこれこそが、彼が『仮面ライダーインサイザー』として戦う事になったきっかけだった。

「分かってるよ。ちよっと、愚痴を言いたかっただけさ。」

そう言っただけで電話を切ると、リッチーはシャツのポケットからサングラスを取り出し、掛けた。

「金は必ず手に入れる。」

どこかのビルの屋上。ウイングナイトの男はそこに立っていた。

男はそこで一人、特訓を開始した。空に向かって拳を振るい、ジャンプして足を払い、長い棒を取り出すと、それで大気突き、叩く。ひとしきりその動きが終ると、ウイングナイトの男はデッキを取り出し、構えた。

「KAMEN RIDER!」

エミリアは自室でパソコンに向かっていた。先ほど、彼女が出したモニターに関する質問の回答を確かめるためだ。ちなみにそこにはシズルもいた。

「エミリア、いい加減にしろ！ランチの時間はあと30分しかないんだぞ！」

「ちょっと待って……あ、回答が来てる。差出人は……ウソお！？クライスじゃん！」

「クライスって…あのクライスか？」

クライスと言うのは、伝説的ハッカーで、プログラーでもある人間だ。

「『僕も似たような生き物を見たことがある。』…クライスのサイトのアドレスとパスワードよ！」

エミリアが慣れた手付きでキーを叩く。映し出された画面には何か映っていた。

「凄い！モニターの写真じゃん！」

「…僕にはばやけた親指にしか見えないんだが……」

と、ノックの音がし、アレンが入ってきた。

「……僕は邪魔ものみたいだな。じゃあ一人でランチを取らせてもらうよ。」

シズルはつまらなそうに部屋を出て行った。

「たった今失踪事件の情報が入ったの。お父さんの手がかりになるかも。クライスの事は知ってる？」

「ああ、オーディオメーカーの名前だろ？」

エミリアは少し苦笑し、説明した。

「クライスってのは、伝説的なハッカーでプログラーよ。未確認生物に関する研究でネット上の有名人なの。」

「へえ。」

「モニターに関する情報をネットで募ってみたら、クライスがこのサイトを教えてくれたの。」

「おい、ちょっと待て。父さんはモンスターにさらわれたってことか？」

「そうだと思う。モンスターの目撃情報とほぼ同じタイミングで行方不明者が出てるでしょ。」

と、エミリアはアレンが深刻な表情をしていることに気付いた。

「俺はただ…父さんは家出しただけで…時期に戻ってくると…」

エミリアは口を開いた。今は一人にしておいた方がいらしい。

「じゃあ、また明日にでも続きを調べるってのは…」

「ああ…そうだな。そうしよう。じゃ。」

アレンはメインストリートを歩いていた。それを見ている、不審な人影にも気付かず。

「……今度こそ1億メセタだ。」

リッチーはズボンの尻ポケットからデッキを取り出し、歩き出した。

アレンの頭に例の音が響く。近くの窓を見ると、インサイザーがこちらに手を伸ばし、手招きしている。

「……ふざけやがって……」

アレンはデッキを窓にかざし、ベルトを出してデッキを挿し込んだ。

「KAMEN RIDER!」

体に瞬時にアーマーが形成され、アレンの姿をドラゴンナイトへと変える。

どこかの廃工場、インサイザーの姿で、リッチーは待ち構えていた。あの特徴のある音が響き、アレンが姿を現す。

「戦う前に教えてくれ。何で俺を狙う？」

「俺が欲しい物を持つてるからさ。」

「それは何だ？」

アレンの問いに、リッチーは嘲るように答えた。

「1億メセタだ…！」

「何だつて!？」

もうリッチーは答えなかった。デッキからカードを抜き、シザーズバイザーに差し込む。

『STRIKE VENT』

飛びかかったリッチーがシザーズピンチで切りつける。まともに食らってよろめいたアレンに、追撃の鉄が振りかざされた。

その一撃を何とかかわして、アレンはカードを抜いた。そして身をひるがえすと、一瞬前までアレンがいた所にあつた木箱がバラバラになった。リッチーの胴体に蹴りを入れると、アレンは素早く立ちあがってカードを挿入した。

「そっちがその気なら！」

『GUARD VENT』

「ハアッ！」

リッチーのシザーズピンチを、アレンの腕に出現した盾、ドラグシールドが防いだ。

「1億だつて？俺がそんな金持ちに見えるか？」

「確かに、せいぜいバーガーショップの店員だな。」

「……傭兵だつつの。」

「一人につき1億メセタ。お前らクズどもを倒せば報酬がもらえるのさ！」

そう言つてリッチーが再び襲いかかる。次々と打ちこまれる重い攻撃はやがてドラグシールドを弾き飛ばし、アレンの体も捉えた。

「グアアッ！」



アレンがつきだされた鉄に吹き飛ばされ、後ろの木箱に激突して粉々に砕く。

「ハッハッハ。」

「クッ！」

アレンは素早く後ろに飛びのいて距離を取り、新しいカードを挿入した。

『STRIKE VENT』

ドラグレッダーが飛来し、アレンの腕にその頭を模した手甲の様な武器が装着される。危機感を感じたリッチーは、シザースピンチを外してもう1枚カードを読み込ませる。

『GUARD VENT』

シザースバイザーに中型の盾、シエルディフェンスが召喚される。アレンは思い切り気合いをためると、リッチー目掛けて腕を突き出した。すると、飛来したドラグレッダーがその方向に向けて炎を吐きだした。リッチーはシエルディフェンスで何とか防いだが、思い切り後ろに弾き飛ばされる。

「おわあっ！」

「この辺でやめてくれねえ？お前に聞きたいことがある！」

だが、リッチーはアレンを無視して襲ってきた。と、いきなり飛び込んできたウイングナイトが、両足でリッチーを蹴り飛ばした。

「どわっ！な、何？」

「来てくれたのか……」

ウイングナイトがリッチーに襲いかかる。今度はリッチーが圧倒される番だった。

「よし！」

アレンはそれだけ言うと、ウイングナイトに加勢した。ひとしきり攻撃を打ち込んだところで、リッチーが両手を突き出した。

「ちよつと待て！2対1なんてフェアじゃねえ！不公平だ！」

それだけ吐いて、リッチーは近くの鏡から出て行った。

「……これから、どうするんだ？」

アレンがウイングナイトに問いかける。

「お前を巻き込みたく無かったが、仕方がない。まず仮面ライダーとしての戦い方を覚えろ。」

ウイングナイトはアレンの方を振り返ると、短く言った。

「…来るか？」

「いきなり来てなんだよ……」

## 第5話／仮面ライダーインサイザー（後書き）

### 次回予告

ウイングナイトの訓練を受けることになったアレン、だが手も足も出ず、ひとまず訓練は終わる。そして、彼は鏡の向こうの世界「ベントラ」についての話を聞くことになるのだった。

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士「ベントラ」

命をかけて、守りたいものがありますか？

## キャラ紹介（ネタバレ注意）（前書き）

メインキャラの紹介をします。ネタバレあります。嫌いな方はスルーして下さい。

原作キャラはオリジナル設定が含まれている奴がほとんどです。ポジションはあえて書きません。

## キャラ紹介（ネタバレ注意）

アレン・クラウド（仮面ライダードラゴンナイト 龍騎）

民間軍事会社「リトルウイング」に所属する青年。本作の主人公。出来る事と出来ない事がかなりはっきりしている方。武器の扱いでも、苦手な武器、特にウィップとアックスはまともに使えたためしがない。カードゲームマニアという一面も。

自宅でカードデッキを見つけた事をきっかけとして鏡の向こうの世界ベントラやゼビアックス將軍の事を知り、大切な人が住むグラールを守るために仮面ライダードラゴンナイトとして戦う事を決意。

見た目はPSP02iのヒュマ男のデフォルトと同じ。

レン（仮面ライダーウイングナイト ナイト）

ベントラからやってきた戦士。仮面ライダーウイングナイトに変身。無口でクールだが、本当は心優しい性格。

ベントラ侵略の数少ない生き残りであり、次に狙われているのがグラールである事を突きとめて、ゼビアックスを追ってグラールへとやってきた。

幼いころに仮面ライダーに選ばれ、それ以来仮面ライダー一筋でやってきた。

エミリア・パーシバル

アレンのパートナー。天真爛漫な性格で、喜怒哀楽ははっきり顔に出る方。今でこそ人並みに仕事はするが昔は超S級のニートだった。亜空間研究の中樞を担う天才科学者と言う意外な一面もある。料理の腕は壊滅的。

仮面ライダーやベンタラの事を知り、アレンを出来る限りサポートするために情報を集める。

シズル・シユウ

総合科学企業「インヘルト社」の社長御曹子。エミリア同様天才的な頭脳を持つが得意な分野は少し異なるらしい。一見クールに見えるが、おちよくられると受け流す事が出来ず大きく出てしまう。またムツツリでカナヅチ。

特技はハッキングで、子供の頃いじめっ子の家のパソコンに侵入して内側から破壊した事があるといううわさもあるが真偽のほどは定かでない。

エミリアやアレンからベンタラの話を知っているが、全く信じようとしなない。

ユート・ユン・ユンカース（仮面ライダーストライク 王蛇）

モトウブの少数民族「カーシユ族」の出身の少年。純粹で真っすぐな性格で、そのため暴走することもしばしば。少しばかり人の話を聞けない。好物はプリンで、よくエミリアにおごってもらっている。種族はニューマンだがビーストの血も入っているため体は丈夫。フォトンへの感受性の高さ起因して常人より鋭敏な感覚を持つ。

仮面ライダーストライクのカードデッキを持ってアレン達の前に現れ、協力を申し出る。

ナギサ・アーデルハイト（仮面ライダーステイニング ライア）

デューマンの少女。アーデルハイトはミドルネームで、名字の予想も大体はつくが違っている場合を考えここでは表記しない。一見しっかり者の印象を与えるが根本的に一般常識が足りず、時折とん

でもない事をやらかす。欠片騒動（仮）において仲間には救われたこともあり、彼らへの思い入れは人一倍強い。

ゼイビアックスにだまされ、他のライダーを倒す事が大切な友達を守ることになる信じ、仮面ライダーステイキングに変身する。

ユーブロン（変身後の名前は無し　オルタナティブ）

別名アドベントマスター。もとはゼイビアックスの部下だったが、ベントラ侵略作戦に反対して袂を分かつ。ベントラを守るためにカードデッキやアドベントビーストを開発。必要と判断すれば自らカードデッキを使って変身して戦う。ベントラのライダーを鍛え上げた人物である。

ゼイビアックス

グラール外にある惑星「カーシユ」北軍の將軍。戦争で荒廃した母星を再建するためにベントラの人々を拉致、次なる標的としてグラールを狙う。人間の姿と鎧の様な姿を取るがどちらも仮の姿であり、本当の姿はグレイの様なエイリアン。

クライス

伝説的なハッカーでプログラマー。未確認生物に関する研究でネット上の有名人。何故か仮面ライダーに詳しく、ユートと接触した事があるらしい。

ルミア・ウェーバー

ガーディアンズ総合調査部所属の少女。英雄の妹という肩書の重さに困りながらも、兄を超えようと努力を重ねる。勝手知った者の前では本来の明るさを出す。

アレンやエミリアに接近し仮面ライダーについて調べようとする  
が目的は不明。



## 第6話 ヘンタラ

鏡の向こうの広場、そこに立つ二人の鎧男。お互いに向き合っている。

「戦士となった以上、戦う術を身につける。」

「そんなことより質問に答えてくれ。」

と、突然ウイングナイトがダークバイザーを抜き、居合の要領で切りかかった。

「何するんだよ!」

「訓練は必要ないか?」

「マジで戦う気かよ!?!」

「敵だと思え!」

ウイングナイトがダークバイザーを振りかざし、再び襲いかかる。その腕を抑え、何とか突き出された刃をかわす。しかし、ウイングナイトは膝を突き出し、アレンの鳩尾をきれいにとらえた。

「どうした?ガードしろ!」

「又ゲウツ!」

アレンはすぐに起き上がり、カードを引き抜いてセットする。

「ちよつと待つてくれよ!」

『SWORD VENT』

召喚されたドラグソードはアレンの手の中に飛び込み、それを振りかざしてアレンはウイングナイトに斬りかかる。

が、ウイングナイトは落ち着き払ってカードを抜き、ダークバイザーヘンタラに挿入する。

『TRICK VENT』

とたん、ウイングナイトが二人に分身する。

「え?双子!?!」

繰り返されたパンチを腕でそらしたが、次に振り向いたとき、ウイングナイトは三人に増えていた。

「何だ！？三つ子かよ！？」

続けざまに斬撃が叩き込まれる。ドラグソードで何とかそらすと、ウイングナイトがさらに増えていた。4人から5人。6人7人8人…  
「何だよ！？」

ウイングナイトがアレンを包囲し、一斉に襲いかかる。流石に8対1では無理があつた。次々に剣が閃き、アレンを捉える。

「こんなの汚ねえぞ！」

訓練だからと言って、ウイングナイトは一切手は抜いていなかった。

「ぼやぼやするな！」

「ここだ！」

「こつちだ！」

「何をしている！」

二人が一斉に剣を突き出し、アレンがよろめく。

と、後ろからもう一人が飛びかかってきた。何とか剣で受け止めても、後ろに弾き飛ばされて思い切り体勢を崩す。

「敵が一人とは限らない。」

「んなモン分かってるつつうの！」

『SWORD VENT』

ウイングナイトの手にウイングランサーが飛び込み、それを振りかざして切りかかってきた。

一撃一撃が重過ぎる。例えるなら、アックスの一撃をダガーで受け止めるようなものだ。こんなものよく振りまわせる。

「クツ…今度はこつちの番だ！」

それだけ言つて、アレンはウイングナイトの懐に飛び込んで後ろに押し込んだ。すぐに受け流されるが予想済みだった。ドラグソードを一閃し、ウイングナイトに斬撃を加える。最初の一撃は何とかかすつたが、それからは全てが受け止められる。と、突然ウイングランサーが閃き、ドラグソードが上空に吹っ飛ばされる。それに一瞬気を取られた隙は見逃されなかった。重い一撃が叩き込まれ、アレ

ンは後ろに思い切り吹っ飛んだ。そこに、ウイングランサーを握ったウイングナイトが歩み寄って来る。地面に膝を突くアレンを見下ろし、ただ一言、言葉をかける。

「今日はこの位にしておこう。」

どこかの窓。突然表面がさざなみ立ち、二人の人間が出てきた。アレンとウイングナイトの男だ。

「今のがトレーニング？…本物の戦いが思いやられる。」

アレンだって素人ではない。それなりに場数は踏んでいるし腕にも自信はある。しかし、普通の戦いとライダーの戦いは勝手が違う。武器召喚、分身、何でもありだ。

「訓練すりゃあいい。」

「訓練つて…でもいったいなんのために？そろそろ質問に答えてくれ！」

と、男はアレンの方に向き直り、一歩近づいた。

「こんなはずじゃなかったが、お前は仮面ライダーになった。」

「仮面ライダー…？」

聞きなれない単語に、アレンが顔をしかめる。

「仮面ライダーはベントラの騎士だ。」

「ベントラ？」

「鏡の向こうの世界だ。ベントラのライダーからカードデッキが盗まれ、地上のお前や、さっきのインサイザーの手に渡った。」

「盗まれた…じゃあ返さなきゃね。」

アレンが少し冗談交じりの様に言ったが、ウイングナイトは真剣だった。

「手放すな。他のライダーから身を守るために。」

「他のライダーって…何人いるんだ？」

「お前と俺を入れて：12人だ。」

12人？と言う事は、単純に考えたと敵は10人と言う事か？

「12人！？でも何で俺を狙うんだ!？」

「俺の仲間だと思われてるからさ。」

と、アレンがいらだたしげに口を開いた。

「そうかい。あんたのせいで俺が悪者扱いか。最高だね。」

突然、頭の中に音が響く。忘れようとしても忘れられないあの音だ。

「トレーニングの成果をためそう。」

「練習試合つてところか。」

鏡の中から、2台のアドベントサイクルが飛び出す。そこから降りたアレンとウイングナイトは、すぐ近くのビルの非常階段にモンスターが1体いるのに気づいた。あの蜘蛛とは違い、人型だ。二人に気付いたか、モンスターは屋上に向かって逃げて行った。

「あそこだ!」

アレンは叫ぶと地面をけた。信じられない跳躍力で、すぐに屋上にたどりつく。が、そこにモンスターの姿は無い。

「かくれんぼか?」

と、いきなり何者かに押さえつけられ、アレンは近くの鉄格子に叩きつけられた。さっきのモンスター、テラバイターだ。後ろからウイングナイトが斬りかかるが、テラバイターは手に持ったブーメランでかわしていく。

「本気で行くぞ。」

『SWORD VENT』

後ろからの斬撃でテラバイターを捉え、正面に回り込んでもう一

撃。すぐにウイングナイトも加わり、テラバイターに斬撃を加えるが、持っていたブーメランが閃いて二人を捉え、後ろによるめかせる。

突然、テラバイターがブーメランを投げつけた。かがみこんで何とかかわした二人を、後ろから帰ってきたブーメランが襲った。

「うわぁ！」

「ぐっ……」

すぐにテラバイターの拳が叩き込まれ、ウイングナイトはよろめいて近くの鉄格子に寄りかかる。

「耳を塞げ！」

ウイングナイトはデッキから新しいカードを抜き、ベントインダークバイザーに挿入した。

『NASTY VENT』

飛来したダークウイングが、何やら音波を発している。と、突然アレンを猛烈な不快感が襲った。

「うっ、うあああ！」

だが、それはテラバイターも同じだった。それどころかアレンより効いている。アレンはその隙にドラグバイザーをオープンし、ドラグレッダーのイラストが描かれたカードをベントイン挿入する。

『ATTACK VENT』

はじめて聞く電子音声と共にドラグレッダーが飛来し、テラバイターに炎で一撃叩き込んだ。

テラバイターが吹っ飛ばされた隙を狙い、アレンとウイングナイトはそれぞれの紋章の描かれたカードを抜いて召喚機にベントイン挿入した。

『FINAL VENT』

ダークウイングはウイングナイトに合体し、ドラグレッダーは飛びあがったアレンの周りを舞う。そして、アレンの必殺技『ドラゴンライダーキック』とウイングナイトの『飛翔斬』が炸裂し、テラバイターはバラバラに吹っ飛んで消滅した。

「ハア…ハア…いいチームワークだったな。」

「仮面ライダーは、あれよりはるかに手強いぞ。」

ドラグレッダーが、空に浮かんでいるテラバイターのエネルギーに向かつて飛び、それを食らった。

「カードについて学べ。覚える事はまだまだある。」

リトルウイング事務所。突然、少女の雄叫びが轟いた。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

と、エミリアが備え付けてあるビジフォンの陰から申し訳なさそうに姿を見せた。

「あ、皆ゴメン…どうぞお気になさらず……」

「オフィスで雄叫びか。あまり行儀は良くないな。」

「でもシズル、見てよこのメール。おっさんからよ。『お前が行っていたモンスターの話については目撃情報もそれなりにあるから、まあ信じない事もない。そこで、ガーディアンズの奴と共同調査することになった』。つまり、ルミアとよ。」

とたん、シズルが飲んでいた缶コーヒーを噴き出した。

「ブフツッ!？」

エミリアは一度、この手の仕事でルミアと一緒にになった事があった。もう最悪だった。何故か街中での調査の類になると彼女は少しばかり上から目線になる傾向にあった。

「ホント最悪だわ…なんでこうついてないの?」

## 第6話 ベンタラ（後書き）

### 次回予告

アレンに「レン」と言う名前を明らかにした男は、インサイザーを発見。レンとリッチーの一騎打ちを見守るアレンの目に、予想もしなかった光景が映る…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 「敗者の宿命」

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第7話 敗者の宿命（前書き）

今回はちょっと長めになりました。これも僕がまとめるのが下手だからです。



## 第7話 敗者の宿命

「エミリア、遅いわよ。」

ホルテスシティの広場で、ルミアはいらだたしげに言った。エミリアの手に握られているのはコーヒーの入った紙カップ。

「ゴメン列が長くて……ってかあたしに何やらす!？」  
が。

「……お砂糖入ってない。」

ルミアはそれだけ言うのと歩み去っていった。

「ああ……んもう!」

エミリアはいらいらして近くの壁を殴りつけた。深刻なダメージを受けたのは拳だったが。

「いつたい!」

どこかの暗い部屋。鎧の様な姿をした一人の男が、カプセルの様なものから出てくる。正面にあるリングの様なものをくぐると、その姿はコナーズに変わった。

コナーズはネクタイを直し、着信音が鳴ったビジフォンのスピーカーを入れる。

「ヤァリツチー。」

「上手くいくとは思えないよコナーズ。」

『そうか?ビルの掃除の仕事なら斡旋してやるぞ。』

「あああ、止めるとは言っていない。ただ、二人の仮面ライダーが相手だなんて知らなかったんだ。」

リッチーが慌ててさっきの言葉に付け加える。

『賢くやれ、二人を仲違いさせりゃいい。』

と、急にリッチーの顔色が変わった。

「マズイ、後でかけなおす！」

目の前では、彼のホイールバイクがレッカー輸送されようとしていた。

「オイオイオイオイオイオイ待ってくれ！持ってくなよ。」

しかし、運転手と思しき男は苦笑いしただけで華麗にスルーした。

「頼むよ！俺にはこれしかないんだ！」

「駐車料金を払わないからだ。」

「ちゃんと払ったさ！どうやって帰りゃいい！」

だが、レッカー車は発車した。何とかヘルメットは回収したが。

と、彼の視界にはバス停の標識が入った。

「……バスかよ。」

クラッド6の居住区。そのとある部屋。

「……ソードベント、ストライクベント、ガードベントアタックベントファイナルベント。ハア……いまさら宿題なんて……」

と、例の気配がした。

バスを待つリッチーの頭にも音が響いた。

「……今度こそ1億メセタだ。」

ウイングナイトの男は、一足先に現場についていた。バイクを降り、ヘルメットを脱ぎ、窓の前に歩み寄る。

そこからそう遠くないところ、と言うよりすぐ近くで、エミリアとルミアが太り気味の男と話していた。締められたベルトにスパナやドライバーが刺さっているところを見ると、おそらくエンジンアが何かだろう。

「自分でもとても信じられないよ。」

「何を見たか説明してくださいませんか？」

ルミアは男と話し、エミリアは素早くメモを取っている。

「ああ……俺はビルの屋上で空調機を修理してたんだ。その機械は光沢があつて鏡みたいなの金属パネルで囲われてるんだが、そこから糸が出てきたんだ。」

「とすると、板から蜘蛛の糸が出てきたという事ですか。」

と、エミリアの頭に例の音が響く。そして、近くの窓にウイングナイトの男が歩み寄り、カードデッキをかざして変身した。

「……したらその糸が俺の体に巻きついて、グイッと引つ張ったんだ。パネルの方に。」

「ちよつと待つてください。板から出てきた糸に体をひっぱられたと……」

「そうだ。」

「待つてください。ちよつと聞いているのエミリア？」

エミリアは、男が鏡に飛び込むところをじつと見ていたが、ルミアに呼ばれて思わず我に返った。

「え……？あ、うん。鏡が引つ張ったんだよね？」

ルミアは一瞬エミリアの方を見ると、男に向き直った。

「続けて。」

「そしたら、二人組の男がやってきて俺を助けてくれて、それからその内かたつぽが変わったんだ。」

「変わった？」

「変身したんだ。鎧みたいな姿にね。」

「どんな外見だったんですか？」

「蝙蝠みたいだった。」

「蝙蝠みたいな恰好だった。」

「エミリアは少し口をはさんだ。」

「えっと、つまりコスプレって事？」

「蝙蝠の鎧だ。黒づくめの。」

「なるほど……」

ウイングナイトが、蜘蛛の足の様な物にはじき出されたが、ダークバイザーを構えてもう一度窓に入って行った。

「……あなたいったい何を見てるの！？ぼーっと向こうを見て、メモも取らずに。それでもプロ!?」

「あ…ゴメン。」

ルミアがそつちを見たときは、ウイングナイトはすでにいなかった。

「失礼しました。以前から注意散漫で。えっと、確認させて下さる？えっと…まずスパイダーマンが糸を出して、バットマンとロビンが助けてくれた、と。」

「え、いやそれはちよつと違う……」

男は訂正しようとしたが、確かにルミアの様に解釈するのが普通だろう。

「あ、そうだあなた、今度のコミック大会に出てみたらどうです？」

ルミアが失礼極まりない発言をする。

「コミック大会!?」

「いえほんの冗談です。お時間取らせました。エミリア行くわよ。」

「ちよつとルミア、今のは失礼すぎるでしょうが！」

「私くらいキャリア積んでれば、偽物はすぐ見分けられるのよ。あの男だつてそう。周りから注目されたいだけよ。」

「なるほど……」

とは言ったものの、口調は明らかに言葉と正反対だ。

「あの、あたし、もうちょっとのこって調査していい？」

「…調査担当者は私よ。あなたは書記兼コーヒー係。次はお砂糖入れなさいよ。それじゃ。」

これだから、ルミアとこの手の仕事をするのは嫌なのだ。

「……んあああ！」

ルミアが去っていくと、エミリアはいらいらで思わず近くの柱に頭突きしていた。その後でかいたんこぶをこしらえたのは言うまでもない。

窓からウイングナイトの男が出てきたのを、駆け付けたアレンは見た。

「おい、何があったんだ？またモンスターか？」

「片づけた。」

「……なあい加減にしろよ！俺には何も教えてくれないのか？例えばほら……名前とか。」

と、ウイングナイトの男は掛けていたサングラスを外した。

「……レンだ。名前はレン。仮面ライダーウイングナイトだ。」

「そっだそうこなくっちゃ！」

突然、レンと名乗ったウイングナイトの男はアレンを壁に押し付け、自分もその横に身を隠した。

「シッ。」

「何だ？」

「仮面ライダーインサイザーだ。」

二人がさつきまでいた場所を、リッチーが上から見ていた。今は壁で死角になっているので、リッチーは二人を見落とした。

「誰だつて？……あ…蟹の男か！アイツが？でもどうしてわかるん

だ？」

「……俺には分かる。」

レンは分かった様な分からないような答えをした。

リッチーが窓をのぞきこみ、別の所に移動しようとする、行く手にアレンが立っていた。

「……また闘る気か？」

「どうかかな。」

「じゃ闘るか。」

と、後ろからレンが歩み寄ってきた。

「オイオイまたお友達かよ。永遠のお友達ってか？一人じゃ怖くて戦えないか。」

「戦えるさ。」

と、レンが言葉をかけた。

「引っ込んでろ。」

「何？お話しが違う。」

レンはリッチーに歩み寄り、デッキの入ったポケットに手を入れた。

「俺とお前で、一騎打ちだ。」

「上等だ。」

と、リッチーは突然レンに言葉をかけた。

「ああちよつと、そこに何かついてる。ああそこそこ。」

リッチーの言葉に、レンはジャケットの肩を見た。

「おつとメセタマークか。がっぽり頂くぜ。」

その言葉は事実上の引き金だった。リッチーとレンの両者がそこにあった窓を向き、デッキを突き出した。

「「KAMEN RIDER！」」

二人のデッキがバツクルに挿入され、ウイングナイトとインサイザーのアーマーが体を覆う。変身が完了すると、二人は窓に飛び込んだ。

ベントラにある、どこかの広場。リッチーとレンはお互いに向き合った。

「カアツコイイ。1億メセタにふさわしいな。」

それを聞くと、レンはダークバイザーを抜いて飛びかかった。リッチーもシザーズバイザーを構えて応戦する。

刃と鋏の応酬。ぶつかり合う二つの武器が火花を散らす。鏝迫り合いの様な状態になったところで、リッチーがレンの胸に蹴りを入れ、一瞬ひるんだすきに後ろから抑え込んだ。

「さあて、1億メセタ頂くぞお！」

レンはデッキからカードを抜き、ダークバイザーに挿入する。

『NASTY VENT』

ダークウイングが放った音波をまともに受け、リッチーは耳を抑えてレンから離れ、うめいた。

「うわあっ！ウあああおお……ちっ！」

軽く舌打ちすると、ダークバイザーを構えたレンと間合いを取り、そのまま横に走り出した。

地面に転がって起き上がると、レンはダークバイザーを開いてカードを抜いた。

『SWORD VENT』

ウイングランサーがレンの手に飛び込むと、それを構えて一閃し、リッチーの体に斬撃を見舞う。

「おわあっ！」

壁に叩きつけられ落下したリッチーは、すぐに立ち上がってシザーズバイザーにカードを挿入する。

『STRIKE VENT』

シザースピンチが腕に装着されると、リッチーはレンに缺を突き出す。刀身でかわした連の後ろに回り込み、さらに一撃。そして腕を突き出し、ウイングランサーを挟み込んだ。

「お前のおかげで金持ちになれるぜ。」

「クウツ！」

レンはダークバイザーを抜いてリッチーの胸を払い、立ちあがって蝙蝠の紋章が刻まれたカードを挿入した。

『FINAL VENT』

それを見て、リッチーも蟹の紋章のカードを挿入した。

『FINAL VENT』

飛び上がった連の背中にダークウイングが合体し、地面から生えるように出てきたボルキャンサーが自分の缺を足場にしてリッチーをバレーボールの要領で打ち上げる。レンはそのままウイングランサーを構えて飛翔斬の体勢に入り、リッチーは体を丸めて飛び上がり、必殺のスピリアタック、シザースアタックで迎え撃った。

「ほおおおおお！！！！」

「だりやああああ！！！！」

ぶつかり合った二人から爆炎が発生する。着地成功したのはリッチーだった。レンは地面に這いつくばり、ダメージでうめき声を漏らす。

「さて、1億頂き……」

と、不意に炭酸水が泡立つような音が聞こえた。

「何だ？」

振り返ったリッチーの目には、波打った水面に反射した光の様な模様を浮かび上がらせ、粒子化して少しずつ消えていくボルキャンサーが映っていた。すぐに消滅は加速し、頭から消えて行って完全に消える。そして、リッチーの身にも同じ事が起こっていた。窓からそれを見ていたアレンが、眉間にしわを寄せてそれを見る。

「いつたい、何が？おいちょっと待て、まだ終わってない！何だこ



れ…俺はまだ戦える！…どうなってんだ！？なあ…おい…頼むよ！」  
しかし、リッチーの悲痛な叫びは届かなかった。

「パパアアア！！畜生！こんなの、嫌だヤね！うわアアアアチクシ  
ヨオオオオオオ！！！！助けてくれエエエエエエ！！！！！！」

そして、リッチーの体は完全に粒子化し、虚空に消えて行った…  
…。

レンが窓から出てくる。アレンは急いで彼を追った。

「なあ、あいつはどうなったんだ！？」

「アイツはベントされた。」

「ベント？」

「転送されたんだ。二つの世界の狭間、アドベント空間に。仮面ライダーが敗れるとそうなる。」

「転送って、いつ戻れるんだ？」

「戻れない。」

レンの答えは簡潔だった。残酷に思えるほどに。

「……だから戦いには負けられない！」

それだけ言うと、レンはバイクで走り去っていた。

「あ、オイちよつと待てよ！」

そう言って走り去っていくアレンを、赤いバイクに乗った男が見ていた…

レンはビルの屋上に座り、回収したインサイザーのデッキを見ていた。かつての仲間のインサイザーに、想いを馳せながら。

アレンは、自室で頭を抱えていた。リッチーが恐怖に叫び、助けを求めて消滅する姿が、彼の頭にフラッシュバックする。

アイツはベントされた

戻れない

「ベント……」

アレンはそう呟き、デッキを握りしめた。

「……もう嫌だ……」

アレンはデッキを引き出しに放り込み、ベッドに座りこんだ。

と、またもや例の音場響く。そして、カードデッキが無視するなとばかりに光を放つ。

「……これで、最後だから……」

近くの窓の中を走り抜けるアドベントサイクルを、赤いバイクに乗った男が見ていた。男はバッファローの紋章が刻まれたカードデッキを取り出し、窓にかざす。緑の電光が走り、ベルトを形成し、

そして……

「KAMEN  
RIDER！」

## 第7話 敗者の宿命（後書き）

### 次回予告

ベントされる事する事に恐怖を感じ、戦いから降りようとするアレ  
ン。しかし、契約が一生続く事を聞かされる。一方ベントラの要  
塞では、新たな仮面ライダーがアレン達を監視していた…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 「二つ  
の力」

命をかけて、守りたいものがありますか？

## ライダーデータ紹介（前書き）

ここまでで登場した3人のライダーのデータを一気に紹介します。  
APやGPは龍騎の公式HPが参考です。武器や技以外のカードの  
ステータスはトン数に換算しません。

## ライダーデータ紹介

仮面ライダードラゴンナイト

変身者：アレン・クラウド 日本名：龍騎

ベントラで開発された12の仮面ライダーのうち一つで、格闘戦を主体とするバランスタイプ。アドベントビーストは無双龍ドラグレッダー。特殊能力系カードは一切保有していないが基本性能は良く扱いやすいため、使いこなせば無類の戦闘能力を発揮する。召喚機は左腕に装備された手甲『ドラグバイザー』。名前は『龍騎』をそのまま英訳したもの。

・ソードベント 2000AP(100t)

ドラグレッダーの尻尾を模した青龍刀『ドラグソード』を召喚。

固有の技『龍破斬』を持つが劇中未使用。

・ストライクベント AP:2000(100t)

ドラグレッダーの頭部を模した手甲状の武器『ドラグクロー』を召喚。そのまま打撃武器として使用するだけでなく、指示した方向へドラグレッダーに炎を吐かせる『ドラグクローファイアー』も使用可能。ちなみにこの技は『仮面ライダーディケイド』において、死なないはずのアンデッドを一撃で爆殺した。他にも『衝空突破』なる技を持つが劇中未使用。

ガードベント GP:2000

ドラグレッダーの腹を模した2枚組の盾『ドラグシールド』を召喚。肩に取り付けて使う事も出来るため、他の武器と併用も可能。固有の防御技『竜巻防御』を持つが劇中未使用。

・アタックベント AP:5000

ドラグレッダーを召喚。火炎放射を行わせた後ファイナルベントにつなげる事が多い。

・ファイナルベント AP:6000(300t)

『ドラゴンライダーキック』。中国拳法のような動きを取った後面を蹴って飛びあがったドラゴンナイトの周りをドラグレッダーが飛び、ドラグレッダーの炎に押される形でドラゴンナイトが必殺の飛び蹴りを見舞う。たいていのモンスターならこの一撃で粉碎できる。

## ブランク体

アドベントビーストと契約していない状態のドラゴンナイト。正確にはドラゴンナイトではない。ドラグレッダー意外と契約する事も一応は可能。未契約状態のため戦闘能力は悲惨なほど低い。召喚機はガントレットタイプの『ライドバイザー』。資料によっては『ブランクバイザー』と呼称されている。

ソードベント AP:800(40t)

細身の剣『ライドソード』を召喚。資料によっては『ブランクソード』と呼称されている。斬りつけただけですぐ折れるほどもろいが本来この設定は台本に無く、撮影中に小道具が折れた際スーツアクターがアドリブで『折れた!?!』とセリフを発したことがきっかけとなっている。ちなみにこのシーンは新規撮影ではなく龍騎の流用フィルム。

ガードベント GP:不明

『ライドシールド』なる盾を召喚。性能は不明だが、おそらく中級以上のモンスターの攻撃を1回受けただけで壊れてしまうだろう。

仮面ライダーウイングナイト

変身者：レン 日本名：ナイト

ベントラで開発された12の仮面ライダーのうちの1つで、ドラゴンナイトよりも接近戦に特化したタイプで、使いこなすにはある程度の熟練が必要。アドベントビーストは闇の翼『ダークウイング』。やや防御面に不十分なところはあるが、身軽さと、他のライダーには無いタイプの特異能力がウリ。召喚機はレイピア型の『ダークバイザー』で、これをそのまま武器として使う事もできる。名前の由来は、『ナイト』の部分を残しておきたかったためこの様になったのではないかと思われる。

・ソードベント 2000AP（100t）

ダークウイングの尾を模した槍『ウイングランサー』を召喚。ナツクルガードが付いており、簡単な盾にもなる。

・ガードベント 3000GP

ダークウイングが飛来して背中に合体し、黒いマント『ウイングウォール』に変化。マントなため実際の防御力は絶望的だが、アタックベントで召喚したダークウイングと合体して得られる飛行能力も一応は使用可能。

・トリックベント 1000AP

最大8人に分身する『シャドレイリユージョン』を発動。分身したウイングナイトはそれぞれがアドベントカードを使用可能。ただし一定のダメージを受けると分身は消滅する。

・ナステイベント 1000AP

ダークウイングが敵の生理的に最も嫌う周波数の音波を放出しながら飛来、敵を攪乱する。ウイングナイト自身は影響を受けない。



ちなみに『ナスティ』という単語は『嫌な、不快な』と言う意味。

・アタックベント 4000AP

ダークウイングを召喚する。ダークウイングは背中に合体してマントにし、飛行能力を得る事が可能。

・ファイナルベント 5000AP(250t)

『飛翔斬』。助走をつけて飛び上がったウイングナイトの背中にダークウイングが合体してマントに変形。ウイングランサーを構え、マントが体に巻きついた漆黒のドリルの様な姿で敵に突っ込む。

仮面ライダーインサイザー

変身者：リッチー・プレストン

日本名：シザース

ベントラで開発された12のライダーのうちのひとつで、防御力に特化した設計。アドベントビーストは蟹型の『ボルキャンサー』。所有カードは少なく基本スペック的にもほかのライダーにやや劣るが防御力は凄まじく、死なないアンデッドを一撃で爆殺したドラグクローファイアーをただのガードベントで跳ね返すという驚異の芸当を披露。ボルキャンサーが人型であるため、アタックベントを使用時の挟み打ちが得意。召喚機は左腕に装備された鋏型の『シザースバイザー』。そのまま振り回して武器とすることも多い。名前の意味を間違えられやすいが、『挟み込み』からきている。

・ストライクベント 1000AP(50t)

ボルキャンサーの腕を模した巨大カニバサミ『シザースピンチ』を召喚。右腕に装着して使用する。他の武器に比べてAPは低いが、ドラゴンナイトの体を一撃で弾き飛ばす威力を見せる。トン数に換算すれば、仮面ライダーカブトハイパーフォームの『マキシマムハ

イパーサイクロン』と同じ威力。

・ガードベント 2000GP

ボルキャンサーの背中の中の甲殻を模した盾『シエルディフェンス』を召喚、シザースバイザーに合体させて使用。絶対に死なないはずのアンデッドを一撃で爆殺したドラグクローファイアーを弾いた。日本の『龍騎』では、仮面ライダー王蛇のファイナルベントを防いだものの、連続攻撃で弾かれ攻撃を凌ぎきれなかった。

・アタックベント 3000AP

ボルキャンサーを召喚。

・ファイナルベント 4000AP(200t)

『シザースアタック』。地面に出現した鏡状のスクリーンからボルキャンサーが現れ、その剣をステップにして飛び上がり必殺のスピリアタックを叩き込む。ウイングナイトの飛翔斬を技そのものではない、いわゆる『ライダージャンプ』で圧倒したものの、AP的に負けていたためベントされる事となった。全ファイナルベントの中で一番威力が低い、トン数に換算すれば仮面ライダーキバエンペラーフォームの必殺技『エンペラームーンブレイク』の150tを凌駕。ただし、最強と名高い仮面ライダーラスのソードベントにAPを抜かれてしまっている。

## 第8話 二つの力（前書き）

第5話の展開をほぼ丸ッぽ再構成しました。

## 第8話 二つの力

ベントラにある電車。いきなり突っ込んできたアドベントサイクルが、そこにいたモンスター、ゼノバイターを撥ね飛ばした。どこかの駐車場に飛んで行ったゼノバイターを追いかけてアドベントサイクルを走らせ、ベルト横の固定具を外して車両から降りたのはアレン。

アレンが構えた瞬間、ゼノバイターはいきなり持っていたブーメランを投げた。アレンは何とかかわしたかに思えたが、後ろから帰ってきたブーメランが背中をかすめる。

「うわぁっ!」

ゼノバイターがもう一度ブーメランを投げる。アレンはそれをかわして上のフロアに飛び上がり、デッキからカードを抜いた。

『SWORD VENT』

が、やってきたドラグソードはゼノバイターのブーメランに弾かれた。

「……は？オイちよつと待てよ!」

が、ゼノバイターは容赦なく襲いかかってきた。ブーメランを剣の様に振り回すが、所詮は力頼みだった。繰り出される斬撃を交わし、腕を掴んで抑え込むとドロップキックを見舞って吹っ飛ばす。

「見てろよ!」

『STRIKE VENT』

ドラグクローはやはり弾き飛ばされたが、計算済みだった。素早く横に転がり、ドラグソードを回収する。

「ハハッ、やると思っただぜ。」

武器さえ手に入ればこちらの物だった。続けざまに斬撃を叩き込まれたゼノバイターの体がよろめく。

が、アレンは気付かなかった。バッファローのカードデッキを腰に取り付け、銃を下げて窓の中からじつと見ていたライダーの姿に

……  
繰り返されたジャンプ斬りが、ゼノバイターのブーメランをへし折る。

「どうだ？参ったか！」

しかし、ゼノバイターは一瞬周りを見ると、素早く上に飛び上がった。アレンはすぐに後を追ったが、既に其処にゼノバイターの姿は無かった。

「オイ！……逃げられた……」

それから少しして、窓からバッファローのライダー トルクが現れ、変身を解いた。と、そこに黒いコートを着た男 リッチーにコナーズと名乗っていたあの男 が出てきた。

「何をぐずぐずしている？私の計画にはアレンが必要だ。」

「下調べの最中ですよ。焦りは禁物です。」

トルクはヤケに落ち着いていた。

「時間をかけ過ぎるのも考えものだがな。」

「ご安心を。」

そう言ったトルクの声は、自信に満ちていた。

「じゃあ君を助けたのが仮面の男と言う訳か？話が出来過ぎじゃないか。」

シズルとエミリアが、リトルウイングの事務所では話していた。

「でも本当の事なのよ。そして、目の前で格好が変わったの。着替えじゃなくて、変身よ。そいつとアレンは仮面ライダー。」

「仮面…なんだって？どういう事だ？」

「あたしにもよく分からない。まるで鎧を着たスーパーヒーローよ。鏡を通って表れて、モンスターと戦うの。」

「エミリア、君の趣味はもつとましかと思っていたが…」

「これはあたしの体験談よ。ホントの話！」

「そんなの信じられるか！」

とその時だった。来訪者が来たのは。

アレンだった。

「よお。あ、今話せるか？」

「あ、うん。奥に行こう。」

どこかの要塞の司令室。コートの男がカプセルの様なものから出てきて手を一回打ち鳴らす。

「やあ。おはようドリュウ君。調子はどうかな？」

ドリュウと呼ばれたトルクの男がそれにこたえる。

「実を言うと將軍、あなたの計画ある部分が、少し理解できません。」

「どの部分かね？私は荒廃した母星の再建に使うグラール人を拉致する。そして君は、グラールの王になる。」

將軍と呼ばれたコートの男が問う。ドリュウの答えは早かった。

「俺が理解できないのは、誘拐の方法です。今の様に一人ずつでは、グラールの王に、すぐになれそうにない。」

「ああ、その点は心配ない。今にテレポートシステムを使って、全人類をいっぺんに拉致出来るようになる。そのために、人類のDNAサンプルが必要なんだよ。」

ドリュウは今一つ理解が出来ていないようだった。顔に書いてある。

「いい物を見せよう。」

そう言っつて、將軍は目の前の画面に手をかざした。と、ニューデイズの市街地が映し出される。そこでは、男が一人歩いていた。画面上で、その男の色々な身体的なデータが映し出される。

「見たまえ、私は時間を無駄にしない。君と違い私はサンプルを集め続けている。じんるいのDNAのね。ターゲットが見つかったら、手下が誘拐してくる。」

画面に映し出された男の背後に、いきなりゼノバイターが現れた。「人類のDNAパターンを解析し、転送装置とのデータリンクを完成すれば、あとはボタン一つで全人類が私の物だ。」

と、將軍はドリュウがげげんそうな表情をしているのに気づいた。「まさか、いまさら良心の呵責など感じているのではあるまいな？」

が、ドリュウはすぐに元の表情に戻った。

「いえ、どっちに住むか悩んでたんですよ。支天閣か、それともホワイトハウスか。」

彼の顔を見れば分かる。完全にドロドロズブズブの欲望まみれだ。

リトルウイングでは、アレンがさっきのレンの戦いを説明していた。リッチーの目的、そして、リッチーの哀れな末路を。

「モンスターは倒さなきゃいけないけど、インサイザーは人間だった。嫌な奴だったけど彼は人間さ！」

「で、結局彼はどうなったの？」

「……ベントされた。二つの世界の間にある異次元に、飛ばされたんだってさ。ライダーが負けたらそうなるらしくて、一回ベントされたら、もう戻れない。」

「じゃあ、あんたが負けたら、おんなじことになるの？」

それに答えたアレンの声からは、苦悩がありありと読み取れた。

「俺が勝ったら相手がそうなるんだ！どっちも嫌だ……」

「アレン、もうかかわらないで。」

「分かってる。」

と、不意に来訪者の知らせがあった。

やってきたのはレンだった。

「アレン、話がある。」

「あ、ああ。」

アレンとレンは、少し奥まった物陰に移動した。

「さっきの事なんだが、俺も、ライダーをベントしたのは初めてだったんだ。」

「その事なんだけど、俺はもう降りるよ。ベントされたくないし、……するのも嫌だ。…ゴメン。」

が、レンはデッキを置いて立ち去ろうとしたアレンを引きとめた。

「そのデッキはもうお前にしか使えない。モンスターとの契約は永遠に続く。カードデッキが無効になるのは、お前が負けた時。」



「……ベルトされた時か。クッそ、何なんだよ、何で父さんは俺を!?」  
「父さん?」  
「何でもない。」  
と、頭に音が響く。モンスターが出たらしい。  
「俺は行く。来れるか?」  
「あ、ああ……」

海沿いの廃工場、大きな姿見の前に立っていたゼノバイターに向かって、2台のホイールバイクが走ってきた。ゼノバイターは鏡に飛び込み、レンはそれを放っていた。

「何で逃がしたんだ?」

レンは、アレンの問いに、メットの風防を外して答えた。

「新しい技を教えてやる。ついてこい。」

そう言っつて、レンはデッキをかざし、ベルトに挿入した。

「KAMEN RIDER!」

そして、スロットルを全開にして鏡に飛び込んだ。

「バイクでもはいれるのか。……よし、俺も!」

アレンもカードデッキをかざし、掛け声を張り上げる。

「KAMEN RIDER!」

ベントラとグラールを隔てる空間、ディメンジョンホール。そこを走るレンが変身すると、乗っているホイールバイクも専用マシン、ウイングサイクルへと変わる。そして、アレンにも同じ事が起こり、バイクの色が変わり、形が変わり、専用のドラグサイクルへと変化した。

「悪くないだろ？」

「スツゲエ、ライダーってこんな力もあるのか。」

「行くぞ。」

アレンとレンは前方にゼノバイターとその部下のレッドミニオンを確認した。そして、相手もこちらに気付く。

ゼノバイターが突撃命令を出し、そして二人のライダーがバイクを走らせたのを、将軍とドリユーが鏡の向こうからじっと見ていた。

レッドミニオンは一斉に襲いかかったが、生身でバイクに立ち向かうなど、倒してくれと言っているようなものだ。早速2体がアレンに撥ねられ、後ろに盛大に吹っ飛ぶ。

レンは完全に慣れている様子だった。ジャックナイフの要領で車体を回転させ、周りから襲い来るレッドミニオンを撥ねる。

あっという間に6体ほどが消滅した。

と、いきなり飛んできたブーメランが二人を叩き落とした。

「おわあっ！」

やはりゼノバイターだった。

「二手に分かれるぞ。」

「ああ。」

レンはダークバイザーを引き抜き、構えて走り出した。

「行くぞ！」

「了解！」

『SWORD VENT』

アレンはドラグソード、レンはダークバイザーを構えて走り出していった。

「いつまでもぐずぐずしている間か？彼らに手柄を取られたくはなからう？」

将軍が口を開いた。

「…御冗談を。あいつらもうすぐ全滅ですよ。」

「あんなにいっぱいいるのか？」

とはいえ、将軍の声の様子は言葉とは異なっていた。

「時間の問題ですよ。」

アレンと言えば、そんな二人になど気付かず、レッドミニオンの相手をしていた。RIDERの相手をした経験があれば、レッドミニオンなど大した相手ではなかった。ドラグソードを振りかざし、襲い来る雑魚共を次々と斬り伏せて行く。

「大丈夫か？」

「絶対調だよ！」

と、ゼノバイターがブーメランを振りかざして襲ってきた。が、すぐに二つの剣がゼノバイターの体を捉える。レッドミニオンに比べれば多少は歯ごたえはあるが、それでも二人なら大した相手ではなかった。

ジャンプ斬りをかわされ、ゼノバイターが地面に倒れこむ。二人はその隙を見逃さなかった。素早くカードを抜き、それぞれの召喚機（ベントイン）に挿入する。

『FINAL VENT』

ゼノバイターは背を向けて逃げ出そうとしたが、2発のファイナルベントは外れなかった。ゼノバイターは粉々に吹っ飛び、爆炎の中でアレンとレンが立ちあがった。

「やったな。行くぞ。」

「おう。」

それだけ言葉を交わすと、二人はその場を後にした。

「厄介なコンビが誕生してしまったようだな。」

と、ドリユーが将軍に進言した。

「将軍、俺に任せてください。必ず奴らを引き離します。」

「出来るかな？」

「俺に2匹くだされば必ず。」

「……いいだろう。」

と、将軍は部屋の壁の方に手をかざした。すると、何も無かった空間に、シマウマのモンスター　ゼブラスカル・アイアンとゼブラスカル・ブロンズが現れた。

「流石です。」

そういて、ドリユーはその場を去った。将軍はそれを見届けてから、ぼそりと言った。

「……ペテン師め。」

アレンとレンが出てきた。アレンが笑顔で声をかける。

「やったな。チームワークだよな。」

「ああ。」

と、妙な気配がした。今までのモンスター出現とは違う気配だ。近くの鏡を見たレンが、突如そこに歩み寄った。

「…ゼイビアックス!?」

アレンの目には、一瞬だけ、黒い、鎧の様な姿が映った。が、次の瞬間にはその姿は消えていた。

「どうしたんだ?」

「向こうからブロックされた。」

レンは自分のバイクの近くで立ち止まり、近づいてくるアレンを待った。

「今のは誰?」

「アイツはゼイビアックス将軍、ベントラを滅ぼした奴だ。」

「滅ぼしたって、どういう事!?!」

レンは、話し始めた。

「ゼイビアックスはエイリアンだ。仮面ライダーは皆もともと奴と戦っていた。だが、俺達の仲間のライダーのうち一人、ストライクと言う奴が裏切った。そしてその後、もう一人も。」

「裏切った!?!」

「お前の前のドラゴンナイトだ。そいつらが不意打ちして次々とカードデッキを奪ったんだ。ベントラ側に残った10人のうち、俺以外の全員がベントトされた。ゼイビアックスは次にグラールを狙っている。奪ったカードデッキで仮面ライダー軍団を作り出している。だから力を貸してほしい。」

レンの言葉を聞いてみると、アレンの脳裏には、再びリッチーの最後がフラッシュバックした。

「…ベントトするんだな。」

「そうだ、やるしかない。このグラールまで滅ぼしたくない。」

「…でも俺は、父さんを見つけれただけなんだ。1年前から行方不明のな。」

レンは、アレンが取り出したビラを見た。

「…分かるよ。俺も大切な人を失った。」

「…レンも大切な人を失ったのか!?!」

アレンはきつと顔を上げた。

「…俺もやるよ。こんな思いをするのは俺だけでいい。大切な人にそんな思いさせたくない。一緒に仮面ライダーと戦うよ。」

「……ありがとう。二人なら、きっとできる。」

二人は、しっかりとお互いの手を握った。そして、それぞれのマシンに跨る。

「行こう。世界を救うぞ。」

「オイオイ、そりゃ俺のセリフだったっの。」

アレンが笑いながら返した。

「早い者勝ちだ。」

二人の戦士は、バイクで走りだした。この絆が、変わらぬものと信じて……

## 第8話 二つの力（後書き）

### 次回予告

レンと共に、ゼイビアックスと戦う事を誓ったアレン。しかし、彼の目の前に現れたドリューは、アレンに、レンがゼイビアックスの手下だと告げるのだった…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 「仮面ライダートルク」

命をかけて、守りたいものがありますか？

第9話 仮面ライダートルク（前書き）

ウラ「ようやく僕の出番だね。」

モモ「お前じゃなくてトルクな。」



## 第9話 仮面ライダートルク

レンは、リトルウイング宿舍のアレンの部屋にいた。彼の机に置いてある、バイクのパーツを一つ持ち上げ、少し見てみる。アレンは、冷蔵庫からペット・ボ・トルの水を出し、レンに手渡した。

「なあ…ストライクと前のドラゴンナイトは、何でゼイビアクス側に？」

レンはアレンから水を受け取り、答えた。

「ストライク…：奴は勝ちにこだわる奴だった。アイツが裏切った時点で、俺達のリーダーはいなくなって、敗色が少しずつ出てきたんだ。たぶん、そのせいだ。ドラゴンナイトは…：俺も知りたい。」  
「とにかく、その前のドラゴンナイトのせいで俺を信用できなかったわけか。」

「お前はあいつとは違うのにな。」

アレンは少しはにかんで見せた。とその直後、あの気配が頭をよぎった。アレンは部屋を出ようとしたが、レンが止めた。

「待て。」

そう言っつて、アレンを洗面所の鏡の前にいざなつた。

「こっちの方が近い。」

アレンとレンはデッキを構えた。ほとばしつた電光がベルトを形作る。

「KAMEN RIDER！」

デッキをスライド挿入し、変身した二人はすぐにその鏡に飛び込んだ。

ニューデイズにある、海沿いの工場、レッドミニオン数体を追つて、二人のライダーがやってきた。

「向こうを頼む、俺はこっちだ。」

「分かった！」

アレンとレンは二手に分かれ、レッドミニオンを追っていった。アレンが追っているレッドミニオンは、少し開けたところまで逃げると、アレンに向き直った。アレンは素早くジャンプして2体の後ろに回り込み、素早く体勢を整えて拳を見舞った。そのレッドミニオンがよろめくと、もう1体にサイドキックを叩き込む。続けてもう一撃。と、さっきパンチを見舞った奴が、後ろから襲いかかってきた。ドロップキックをまともに食らい、アレンが体勢を崩した隙に、2体が飛びかかってきた。アレンはそのうち1体を捕まえる。と、もう1体の拳の盾にした。が、パンチを喰らって後ろにがくと倒れたレッドミニオンの首に顔をぶつけ、アレンの後頭部が後ろのコンテナの角に衝突する。

「いってえ！」

素早く相手に向き直り、回し蹴りを見舞う。

と、突然飛んできたブーメランが、アレンの背中をまともにとらえた。そこを見ると、シマウマのモンスター、ゼブラスカル・アイアンがいなかった。

「お前、覚悟しろよ。」

一方レンは、入り組んだ道に逃げ込んだレッドミニオンを追っていた。敵は巨大手裏剣を装備したものが1体、丸腰が1体。コンテナの陰からいきなり出てきたレンが、レッドミニオンのうち1体に素早く拳を叩き込む。反対側から大きな手裏剣を構えて迫ってきたレッドミニオンの攻撃を交わして背中に蹴りを叩き込み、もう1体に勢いをつけた右ストレートを見舞って吹っ飛ばす。手裏剣もちが武器を構えて連に向き直り、レンも素早く構えた。

突き出された手裏剣をダークバイザーで素早くかわす。レンの斬撃を、どうやら指揮官クラスだったらしいそのレッドミニオンは手

裏剣でことごとく防いだが、やがて武器を上に乗っ飛ばされる。が、素早く落ちてきた武器を構え、レンに斬撃を加える。レンもそのレツドミニオンに負けない巧みさでさばいていく。と、反対側から丸腰の方が飛びかかってきた。レンは素早く身を翻し、投げつけられた手裏剣をかわして丸腰の方に当てる。その丸腰の方が消滅し、コテナの上に飛び上がった武器持ちに蹴りを見舞って地面に叩きつけ、消滅させると素早く駆け出して行った。

資材置き場と思しき場所。ゼブラスカル・アイアンがいななないていたのをアレンは見ていた。

「待つてろ！」

アレンはジャンプして殴ろうとしたが、ゼブラスカル・アイアンが突き出した拳は空中でかわすすべのないアレンの体をまともにとらえ、地面に叩きつけた。

「のわあ！」

容赦なく、ゼブラスカル・アイアンが襲いかかる。起き上った直後にキックを見舞われ、アレンは地面に転がされた。再び迫ってきたゼブラスカル・アイアンにアレンは飛びかかり、そのままヘッドバッドを見舞った。ゼブラスカル・アイアンは体勢をかなり崩したが、アレンの頭もそれなりにダメージを喰らった。

「うわあっ！ いったえ……頭突きは攻撃に向かないのね……」

すぐに繰り出された攻撃を素早くかわして拳を叩きつけ、ドロップキックを見舞ってゼブラスカル・アイアンの体を後ろに吹っ飛ばす。続いてデッキからカードを抜き、ドラグバイザー（ペントイン）に挿入した。

『STRIKE VENT』

「はああ……うああ！」

ゼブラスカル・アイアンは体を縞模様に沿って別れさせ、ダメー

ジを軽減したものの、やはりドラグクローファイアの直撃を受けてただで済む訳はなかった。

「ハア、びつくりしたる？」

と、その光景を見ていたライダーがいた。

緑のスーツ。戦車を彷彿とさせるアーマー。メカニカルなフェイスペーツ。そしてデッキには緑のデッキ。

ゼブラスカル・アイアンがよるめきながら立ち上がる。アレンはカードを抜き、挿入した。

『FINAL VENT』

咆哮を上げながらドラグレッダーが飛来し、アレンが宙に飛び上がった。ゼブラスカル・アイアンに必殺の飛び蹴りを叩き込んだ。

「だりやあああああああああッ！」

それをまともに食らったゼブラスカル・アイアンは粉々に爆散し、アレンは息を突きながら立ち上がった。

「ハア…ハア…しつこい奴め…ハア…」

チュイイイイイン チュドオン！

ものすごい音とともにアレンの後ろが爆発した。爆風を喰らって倒れたアレンに、さらにもう1発叩き込まれる。

思わず見やったアレンは、緑の、重戦車の様なライダーがいるのを見た。そう、トルク ドリユーである。両手で構えた大型のキャノン砲から、さらに追撃の砲弾が叩き込まれる。

「うわあっ！…別の仮面ライダー！？」

ドリユーはキャノン砲を捨て、腰に取り付けた大型拳銃を抜いて引き金を引く。

「オイちよつと待て！」

が、ドリユーは決して容赦しなかった。拳銃から発射された光弾が、アレンを捉える。

「よせ！」

そう言ったアレンに、さらに光弾が叩き込まれる。何とかかわし

た直後、資材の山が崩れ、アレンが見えなくなる。周りを見渡したドリューは、突然響いた気合いを聞いた。

「どおりやあああああああああ!!!!!!!!!!!!」

アレンがドラグソードを振り上げ、ドリューに斬りかかったのだ。近距離にあればこっちの物だ。ドリューは次第に押されていった。

が、いきなり至近距離で、ドリューがアレンに光弾を連続でブチ込んだ。

「ぐあああ!!」

その隙に、ドリューはアレンを押さえ込んでひざ蹴りを何発もお見舞いした。

「うああ…俺はアレン・クラウド。お前は何なんだ？」

「……お前をベントしてやる。」

ベントを知っている。と言う事は、少なくともライダーに関してそれなりに知識はあるのだろう。

「ハッ、ウイングナイトが言ったとおりだ。何故こんな事をする？分からないのか？ゼイビアックスの狙いはグラールだ！ウイングナイトと一緒に奴を倒そう！」

「……何だと？ウイングナイト一緒に…ゼイビアックスを…倒す？」

ドリューの言葉は、少し驚きを含んでいた。と、ドリューがアレンから離れ、変身を解いた。

「…俺は…仮面ライダートルクだ。」

それから少しして、二人は変身を解いた状態でそのあたりを歩いていた。

「レンが言ったのか？ゼイビアックスと戦ってるって？」

「ああそうだ。グラールをベントラの二の舞にはさせないって。俺はグラールをま美里たい。だからレンに協力してる。何か問題があるか!？」

「ハア……いいかアレン、お前は騙されてる。奴はゼイビアックスの手下だ。カードデッキをベントラから奪い取ってグラールにはら撒いたんだ。」

「それはストライクと前のドラゴンナイトの仕業だ！」

が、アレンが何を言ってもドリユーは聞く耳を持たなかった。

「ストライクが裏切ったのは本当だが、前のドラゴンナイトはウイングナイトに歯向かった。そして、奴に一番最初にベントされた。」

「嘘だ……」

「俺はこの目で見たんだ！」

そう言っつて、ドリユーは語り始めた……

レンは俺達をゼイビアックスの基地に案内して、騙し討ちにしたんだ。

レンは俺に何度も何度も切りつけ、俺が倒れた直後にドラゴンナイトに襲いかかった。全く備えが出来なかったドラゴンナイトは、凌ぐのがやっとだったんだ。

『どうしたんだレン、止めてくれ！』

『やれウイングナイト、始末しろ！』

ゼイビアックスはレンに指示を出していた。その時点で、その場にいた皆が真実を悟った。俺は……何もできなかったんだ。

『レンやめろ！俺達とベントラを売ったのか！？』

『古い世界にオサラバするのさアダム。仲間になれ、そうすれば見逃してやる。』

『断る！』

アダム　ドラゴンナイトは頑として拒否した。だが、レンは圧倒的すぎたんだ。

『ならお前ともオサラバだ！』

結局、アダムは武器も奪われ、レンに一方的にやられるだけだったんだ。

『いいぞウイングナイト。』

ゼイビアックスはウイングナイトの仕事ぶりに満足していた。レンは嘲るようにアダムの剣を投げ捨て、ゆっくり、歩み寄ったんだ。

『最後の警告だ。仲間になれ。』

『誰が……！』

俺はただ見ていることしかできなかったんだ。アダムがかつての親友に裏切られ、絶望の中でベントされるのを……

『やれウイングナイト、そいつをベントするのだ！』

レンはそれに従った。何の躊躇もなく、親友にファイナルベントを使ったんだ。

『サヨナラだ。』

【FINAL VENT】

そして、アダムに無慈悲な一撃を見舞ったんだ。そうして、アダムはベントされた……

『レン……俺は……俺達は……』

俺はすんでの所で逃げだした。自分の身の事だけで精いっぱいだったんだ……

「だったら、何でレンは俺を助けた！？ベントするチャンスはいくらでもあったのに。」

アレンがいらだたしげにドリユーに問いかけた。

「分からないのか！？騙し討ちが奴の手口なんだ。お前を信用させて、お前に近付き…ベントするつもりなんだ。」

が、アレンはその言葉を信じようとしなかった。

「そんなのウソだね。信用できるか。」

「そうか…そんなにベントされたいか、親友と思ってたやつに。」

とその時、少し離れた所に、レンが姿を現した。抜き身のダークバイザーを手に持ち、ゼブラスカル・ブロンズと切りあっている。

「丁度良かった。化けの皮をはがしてやる。黙って見てろ、ピンチの時こそ本性が露わになるんだ。」

そう言っ、ドリユーはデッキを取り出し、前方にかざした。ほとばしった緑の電光が、やはりベルトを形作る。

「KAMEN RIDER！」

スライド挿入されたデッキが回転し、ドリユーは次の瞬間、仮面ライダートルクに姿を変えていた。

「見つかるなよ。」

そう言っ、腰に付けた拳銃　　マグナバイザーを抜き、ゆっくりと近づいて行った。



突如、切り結ぶレンとゼブラスカル・ブロンズの間を、エネルギー弾が駆け抜けた。見ると、ドリユーが銃を構えてたっている。ゼブラスカル・ブロンズはその隙に逃げだした。

「あきらめるウイングナイト、俺達は止められないぞ！」

「どうかな……」

レンは一気に襲いかかった。あつという間に、形勢はドリユーに不利になった。

「お前とゼイビアックスには負けない！」

レンはあつという間にドリユーを切り倒した。地面に横たわったドリユーに、鈍く光る刃が突きつけられる。

「…何だと？」

「手を引け！」

「…断る。」

「お前達にグラールは支配させない！」

「ハア？」

アレンは遠くにいたので、二人の会話は聞こえなかった。

とその時、彼の眼に、あの鎧の様な姿が飛び込んできた。

「やれ、ウイングナイト、ベントするのだ！」

「ゼイビアックス！？」

ゼイビアックスはウイングナイトに指示を出した。どうやらドリユーに協力を頼まれていたようだ。

「その邪魔なライダーを始末しろ！我が右腕よ！」

「何だと？」

一瞬、隙が出来た。その隙に、ドリユーは引き金を引きまくった。「グアアア！！！」

エネルギー弾をしこたま叩き込まれ、レンがひるんだすきに、ドリユーは逃げてきた。

アレンは、ショックを受けていた。会話がよく聞こえなかったのもあるが、ゼイビアックスがウイングナイトに指示を出しているという事実が、彼から他の感覚をほとんど奪い去っていた。

「おい！」

レンはドリューを追ったが、ドリューは鏡に飛び込んだ。レンは短く舌打ちし、去っていった。

「……逃げたか……」

と、レンは向こうからやってくるアレンの姿を見た。

「ゼイビアックスの手下なのか!？」

「何を馬鹿な。」

「見たんだ!ゼイビアックスとグルになった。他のライダーを始末しようとしてるんじゃないのか!？」

「連中にだまされるな!本気でそう信じてるのか!？」

「俺がトルクに協力したらどうする?俺までベントするんだろ!……」

「……信じてたのに。」

そう言っつて、アレンは去っていった。

「……トルクの奴め……くそっ!」

## 第9話 仮面ライダートルク（後書き）

### 次回予告

クライスのメールを頼りに、パルムの病院に潜入したエミリアは、そこでアレンの父の姿を見つける。行方不明の彼が、なぜそこにいるのか…？

一方、アレンとけんか別れしたレンは、ドリユーと遭遇、彼の目的を聞く事となる…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『敵が味方か』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第10話 敵か味方か（前書き）

JTCとの電話シーンは、今後の展開に影響するので丸ごとカットしました。

## 第10話 敵か味方か

国道の近く、ドリユーはアレンに歩み寄り、持っていたカミ・カ  
ツプのコーヒーを手渡した。

「なあ、辛いのは分かる。信じてたやつに、裏切られたんだからな。」

「

「こんなの信じれないよ。」

「俺だって同じだったさ。」

とその時だった。

「アレン！」

エミリアだった。

「エミリア？どうしたんだいったい？」

「聞いて。失踪した人を探して、クライスのメールを頼りに病院に  
行ったら……あんたのお父さんを見つけたの。」

「何だった？」

エミリアは話し始めた…

エミリアは、クライスが郵送してくれた変装用の衣装に身を包み、  
クノーと共に「未確認疾患センター」に潜入していた。途中、都合  
が悪くなってスチームが付いていない、底が金属のタイプのアイロ  
ンでスタッフを1人殴り倒したのは少し申し訳なく思っていた。

『警備員じゃなくて、警官だったよね、今の。』

『この秘密が重大だという事だ。』  
とある病棟、そこをのぞきこんだエミリアが何となしにその力  
ーテンをめくった。と、彼女達は凍りついた。  
『え……？クノーさん、これって……』  
『アレンの……父親じゃないのか？何でこんなところにいるんだ？』  
『あたしだって知らないよ！』

ホルテスシティの中央ブロックにある広場で、レンは一人、物思  
いにふけていた。アレンの、いら立ちに満ちた言葉が、脳裏によみ  
がえった。

ゼイビアックスの手下なのか！？

俺がトルクに協力するって言ったらどうする！？俺までベントする  
んだろ！…信じてたのに。

「……奴らの思うつぼだ。」

と、レンは入口が開く気配を感じ取った。見ると、近くのビルの連絡通路に、ガゼルの様なモンスターがいるのに気づいた。

デッキを手に取る。が、レンは少しそれを見ると、懐にしまった。

ベントラの、似たような場所。2体のガゼルモンスター　メガゼールとギガゼールの後ろから、レンが声をかけた。

「オイ、パーティー会場をお探しか？……ここだぜ。」

レンはサングラスをかけると、武器を置いて襲いかかってきたガゼルに向かって行った。

ギガゼールが繰り出した拳を素早くかわし、懐に潜り込んでパンチの嵐を見舞う。勢いをつけた最後の1撃にギガゼールが吹っ飛ぶと、メガゼールが襲いかかってきた。後ろ回し蹴りを見舞われよめいたメガゼールに、続けてサイドキックが撃ち込まれ、レンはそのまま横にローリングして間合いを取った。

「ハアッ！」

そしてそのまま一気に距離を詰め、低弾道の回し蹴りで足をすくった後、宙を舞うメガゼールにキックを放って弾き飛ばす。

と、起き上がったメガゼールが槍を手に取り、同じく武器を取ったギガゼールと共に襲いかかってきた。レンは近くにあったステルニウムの棒を手に取り、繰り出されたガゼルの武器を押し込んだ後2体に飛び蹴りを放つ。が、起き上がってきたギガゼールがレンの頭上に武器を振り下ろす。何とか棒で防ぐが、上からたたきつけ

られたメガゼールの槍が棒をへし折った。レンは双剣の要領で棒を構え、ガゼルに的確な攻撃を打ち込む。

と、突然ギガゼールが上空に飛び上がり、近くのビルの屋上に消えた。メガゼールも、相方の後を追っていく。

「…何やってんだ、俺。」

「入口ここだろ？」

「正面からはまずいの。裏からよ。ってか、あの人も？」

エミリアはドリユーの事を言っていた。

「ああ。」

ドリユーは愛想のいい笑みを浮かべた。

そして病棟の中、3人はアレンの父、フランクのいる病室にたどりついた。

「父さん？父さん！？俺だよ、アレンだ！俺の事が分からないのか！？何があった！？」

と、ドリユーが口を開いた。

「ゼイビアックスにライフエナジーを吸われたんだ。エナジーを吸いつくされると、こういう夢遊病状態になる。」

「治療法は無いの？」

エミリアの問いに、ドリユーは少しももった。

「あるけど…」

「あるけど何だ！？父さんを助けるためだったら何でもする！」

「……ゼイビアックスだ。奴を倒すしかない。ウイングナイトもだ。」

と、病室のカーテンが、しゃあっと音を立てて開いた。出てきたのは医師だった。

「二人とも、ここでなにしてる？ここは立ち入り禁止だ、出るんだ。」



「え、二人？」

振り返ると、ドリユーの姿は無かった。

それから数分後、アレンとエミリアはフランクのベッドの前に座っていた。と、カーテンがまた空いた。出てきたのは警官だった。

「アレン君、君の入館許可を取っておいた。症状を教えなかった事はすまなかった。私にもどうこうできるものじゃないんだ。今は落ち着いてるし命にも別状はない。夜の街を他の連中と徘徊していたそうだ。この事は他言無用だ、二人とも。」

「アレン、待つてよ！」

「ドリユーを探す。」

「何でウイングナイトを……」

「俺は見たんだ、ゼイビアックスがウイングナイトとグルになってるのを！治すには奴らを倒すしかないって……」

アレンの声は、悲痛だった。

そのすぐ後、アレンはレンと出くわしていた。

「父さんを直す方法は無いのか!？」

「何の話だ。失踪してるんじゃないのか?」

「ゼイビアックスにライフエナジーを吸われたって……」

「そうだったのか……」

レンの声から、感情はあまり分からなかった。  
「治すにはゼイビアックスを倒すしかないって…」  
と、レンが唐突にアレンの言葉を遮った。  
「治療法なんて無い。治せる人はいたが死んでしまった。」  
「俺をゼイビアックスから遠ざける気か！？その手には乗らない！」  
そう言っつて、アレンは去っていった。  
「…トルクの奴め…」

その後バイクで走っていたレンは、ドリユーの姿をはっきりと見た。向こうもこちらに気付き、持っていた携帯をしまつて逃げだした。

「まて！」

逃げたドリユーを追って、レンは変身してベントラに飛びこんでいた。と、いきなり砲弾が叩き込まれる。そこをみると、ドリユーがいた。

「俺に用か？」

「アレンをだましたな！」

「ガキなんざちよろいもんさ。」

それを聞いて、レンはすぐにドリユーに斬りかかった。ドリユーは繰り出された斬撃を、ダークバイザーのナツクルガードに腕をあてて防いだ。

「グラールを売って何を手に入れるつもりだ？」

「ゼイビアックスがグラールの王にしてくれるってさ。それにグラ

ール最後の男になれば、カワイコちゃんも選り取り見取りってわけ。

「廃墟の街でハーレムごっこか。それがモテない男の夢ってわけか！」

そう言つて、レンはドリユーを蹴つて間合いを取った。

「バカか！？用済みになればゼイビアックスはお前もベントするぞ！」

「上手くやるぞ。」

「せいぜい夢を見るんだな。」

「何とでも言え。」

そう言つてドリユーはマグナバイザーを抜き、カードスロットをオープンしてカードを挿入した。

『ATTACK VENT』

地面から生えてくるように、重戦車のごとき重厚なフォルムのモンスター、マグナギガが現れる。危機を悟ったレンはすぐに逃げたが、ドリユーはさらにもう一枚読み込んだ。

『FINAL VENT』

マグナバイザーをマグナギガの背中のソケットに差し込み、マグナギガが全身の火器を展開した。

「ようやくゴールが見えたな？俺は王国、お前は天国。」

それだけ言つと、ドリユーは引き金を引いた。瞬間、全身の火器が一斉に火を噴いた。ミサイル、レーザー、砲弾、様々なものが飛んでくる。

「うあああああ！！！！！」

とっさに物陰に身を隠したおかげで直撃は何とか免れたが、爆風と振ってきた破片で、レンには大ダメージが撃ち込まれた。

凄惨な一斉射が鎮まると、その地形が大きくえぐれて変わっていた。

「……ちよろいもんぞ。」

## 第10話 敵か味方か（後書き）

### 次回予告

アレンやレン達の前に現れた新たな仮面ライダー。それは、最強であることにこだわる格闘家、仮面ライダーキヤモだった。援軍を必要とせず、レンばかりかアレンやドリユーも攻撃するキヤモの行動から、次第にアレンは疑惑を募らせる…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『仮面ライダーキヤモ』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第11話 仮面ライダーキヤモ（前書き）

ようつぶに第8話の3ノ3が無いので、その辺りはオリジナルです。

## 第11話 仮面ライダーキヤモ

全壊し、無残な姿をさらす廃工場。レンは、そこに倒れていた。

「う……ッ……」

止めなくては。アレンに何とかして真実を悟らせねば。その一心で傷付いた体に鞭打ち、レンはその場をよろめきながら後にした。

ダグオラ郊外の、3階建てくらいの横長の建物。その中の1室で、二人の男がグローブをはめて向き合っていた。片方は頭にバンダナを巻いた背の高い男、もう一人は、黒い肌とドレッドヘアが印象的だった。

「よし、次はスパリングだ。」

「ハイ、師匠。」

二人は構え、たがいに拳を繰り出した。鍛えた格闘家らしく的確に攻撃を叩き込み、防ぎ、フェイントをかけて間合いを取る。

ドレッドヘアの男が師匠と呼ばれたもう一人の胴にストリートを見舞うと、師匠は少しよろめき、それから微笑んで見せた。

「なかなかやるじゃないかグラント。」

グラントと呼ばれたドレッドヘアは師匠に更に飛びかかったが、どうやら、さつきまでは少し手加減されていたらしい。拳をかわされてカウンターキックを見舞われ、グラントが大きくよろめいて近くのドラム缶に寄りかかる。

「いいか、一瞬でも気を抜いてはならん。」

師匠は、グラントがドラム缶の中に手を入れて何かしている事に気付かなかった。

「さあ、もうひと勝負だ。来い。」

「ああ…勝負だ…」

グラントがぼそりと呟くと同時に、スパーリングが再開された。支障が蹴りを放つ。と、グラントはその足をつかみ、太腿に右フックを叩き込んだ。

「グアアッ！」

「気を抜いちや駄目だよ。」

グローブで殴られた者の声ではなかった。どうやらグラントは、さつきグローブに何か仕込んだらしい。続いて、グラントの拳が師匠の左肩を捉え、続いて止めのボディブローが炸裂した。

「がああッ……………」

グラントは勝ち誇った笑みを浮かべ、地面に倒れて他の門下生に助け起こされた師匠を見た。

「………… 卑怯者… 武道を何だと思っている！」

「強い奴が一番になる、そんだけのこつたる。これで、俺は、あんたを、越えた。」

門下生たちは構えようとしたが、師匠が止めた。

「構うな！ 卑怯者とは… 戦う価値は無い。」

そう言つて、彼らは去つていった。と、その直後、グラントが初めて聞く声がした。

「その言葉は撤回せねばな。戦略的と、言うべきだろう。」

暗がりから、黒いコートの身を包んだ男が出てきた。

「あんたは？」

「マトック少佐。君の実力はさつき拝見した。もっと、名をあげたいだろう？」

「もう叶った。」

「場末の道場の師を倒したからか？ 大したものだ。だが、君にはもつとふさわしい戦場があると思う。君を雇いに来たんだよ私は。」

「傭兵か？」

「却下だ。契約軍人とも思つてくれ。…二つの世界で最強にはな

りたくないか？」

マトック少佐は、そう言ってグラントの顔を見つめた。

「何だと？」

マトック少佐は、不意に懐から、あるものを取り出した。

「…持ってみたまえ。」

グラントが手に取ると、ライムグリーンの『ソレ』は光を放った。

「これは何だ？」

「栄光だ。……栄光へのチケットだ。」

マトック少佐　ゼイビアックスは、カメレオンのエンブレムの入ったカードデッキを見つめるグラントを見ながら、満足げな笑みを浮かべていた。

『仮面ライダーキヤモ』誕生の瞬間だった……

パルムの陸橋を、2台のバイクが走っていた。その二人の頭の中に、例の音が響く。

「こつちだ！」

「ああ！」

アレンとドリュールは、目的の場所でバイクを止め、デッキを取り出した。

ベントラの資材置き場、そこにやってきた2台のアドベントサイクル。そこから降り立ったのはドラゴンナイトとトルク。



二人は構え、ゆっくりと進んでいった。とその時、突然モンスターが姿を現した。シュモクザメのモンスター、アビスハンマーだ。アビスハンマーは二人の姿を認め、胸のキャノン砲から弾を撃ち出した。

「ぐああ！」

ドリユウの腕に、その弾が命中する。ドリユウはカードを使おうとしたが、腕のダメージのせいでマグナバイザーが抜けない。

「お前が使え。」

「え、俺が？使えるの？」

「試してみるよ。」

半ば強引に、ドリユウがアレンにカードを渡す。アレンはドラグバイザーを開き、そのカードを読み込んだ。

『LAUNCH VENT』

空中から、左右計2門のシオルダーキャノンが飛来する。

「おお、スツゲェ！」

が、その大砲 ギガキャノンは、アレンではなくドリユウにまっすぐ飛んできて、その体に装備された。

「…え？オイちよつとなんだよこれ！カード使ったの俺だろ！」

アレンが声をかけるとドリユウが振り返り、アレンはギガキャノンの砲身に頭をぶつけた。

「あいつてえ！」

「気を抜くな！戦いはもう始まっている！」

ドリユウはそれだけ言ってアビスハンマーの前に進み出ると、エネルギー弾を続けざまに見舞った。

「ほら、これならどうだ？」

アビスハンマーの砲弾をかわし、アレンは再びカードを挿入した。

『GUARD VENT』

「よっしゃ来い！」

が、砲弾はアレンを直撃した。

「…なんかもう嫌になってきた…何なんだよこれ！何で俺のどこ来

ないんだよ!」

「悪い、またこつちだ。お前のやり方が悪いんじゃないのか?」

ドリュューは、召喚された大きな盾、ギガアーマーをかざして見せ、横に置いた。

「そうなのか?」

「ほら、これならどうだ?三度目の正直って言うだろ?」

ドリュューは、またしてもアレンにカードを渡した。

「スリーストライクならアウトだ!」

『ATTACK VENT』

地面に鏡の様なものが出現し、マグナギガが召喚される。

「よし。」

ドリュューはその陰に隠れようとしたが、アレンがその体を突き飛ばした。

「させつかよ!」

アビスハンマーの砲弾が、今度はドリュューを襲った。一方アレンは、マグナギガの体見守られて、アビスハンマーを挑発する。

「へっへっ当たりませ〜ん!」

『STRIKE VENT』

アレンはマグナギガの陰に隠れてカードを挿入した。

ベントイン

「おい、何する気だ?」

「まあ見てなつて。」

直後、アレンはドラグクローファイアを炸裂させ、ドリュューもギガキャノンをも2門とも発射した。アビスハンマーは全てまともに食らい、粉々に爆散した。

「悪か無いな。」

「そつちこそな。やるじゃん。」

ゼイビアックスの要塞。グラントはそこに案内されていた。

「どうだね、これが我々の本部だ。」

「スツゲエな。こんなのみた事無い。」

「当然だ。これがさっき言った第2の世界。このテクノロジーを見たまえ。」

ゼイビアックスは、そう言ってサングラスを外した。

「我らこそ最強の軍隊。しかし、最強を自称する連中が現れてね。見たまえ、ターゲットのウイングナイトだ。撃滅するのだ。成功すれば報酬は弾む。」

「いや金なんかどうでもいい。こいつ強いのか？はったりじゃねえだろうな。」

「1番を気取ってるらしい。」

「……今日からは2番だ。」

グラントは、ライムグリーンのデッキを持ち上げて見せた。

エミリアは、家でメールを打っていた。

「あなたの言った通りの病院で、夢遊病患者をたくさん発見しました。有益な情報を有難う……」

と、そこまで打ったところで、急に後ろから抑え込まれ、エミリアは近くの窓に引きずり込まれた。

「おいエミリア、さっきの本なんだが……」

直後、クラウチが扉から出てきたときには、彼女の姿は無かった。

アレンは、部屋にドリュウーとはいつていた。

「いつてえよ。お前と組むといつもああなるのか？」

「俺はめちゃくちや楽しかったぜ。なあ、フオローしただろ？」

「ああ……」

「じゃあ、冷蔵庫を開ける、腹が減った。」

アレンはそう言われ、冷蔵庫を開けて小さな容器を取り出した。

「冷蔵庫ね……マカロニチーズがあるけど、賞味期限切れてるかも。

後は……ポテトフライとか？」

「賞味期限は？」

「ああ、たぶん切れてる。」

とその時だった。二人は、例の気配を感じた。

「……メシ食う暇もないってか。」

「みたいだね。」

ベントラのビル街。エミリアは、サメのモンスター、アビスラッシャーに腕を引っ張られていた。

「ちよつ、離しなさいよ！離して！」

アビスラッシャーを殴りつけても、手は離してくれなかった。

と、その時だった。レンが、そこに向けてまっすぐ歩み寄ってきた。アビスラッシャーにパンチを叩き込んでふっ飛ばし、デッキを構えてベルトを形成する。アビスラッシャーはすぐさま飛びかかったが、レンはその腕をつかむとそのままデッキをスライド挿入した。

「KAMEN RIDER！」

直後、現れたリングがアビスラッシャーをふっ飛ばし、そのままウイングナイトのアーマーを形成した。

「其処を動くなよ。」

レンはそれだけ言ってアビスラッシャーに斬りかかった。アビスラッシャーはのこぎりの様な剣2振りに対抗していた。

その対決を、じつと見る人影があった。

グラントだった。キャモのデッキを手にして、機会をつかがう。そしてその場に、アレンとドリユーも到着した。

「レン!？」

「マジかよ……」

ドリユーは少し動揺していた。

「え?」

と、ドリユーは誤魔化すように言った。

「そうだこつしよう。ウイングナイトを助けるふりをするんだ。そして、奴が背を向けた瞬間に倒すんだ。そうしたら俺が止めを刺してベントする。できるか?俺に100パー協力するか、0かだ。」

「あ、ああ…分かった。」

二人は階段を下りてその場に向かおうとした。と、グラントが行く手を阻んだ。

「お前ら誰だ?」

「俺達もウイングナイトを追ってる。味方だ。」

「ハッ、マトック少佐から援軍の話は聞いてねえ。これは俺の任務だ。」

「マトック少佐って、誰?」

アレンが問いかけるが、ドリユーとグラントはいきなりデッキを構えた。

「一人で出来るもんってか?お手並み拝見と行こうか。」

「俺に戦わせて、栄光だけ横取りしようってか?まずはお前ら雑魚から片付けてやんよ!」

「吠え面かくなよ。」

「二人とも落ち着け!喧嘩なんかしてる場合じゃ……」

「喧嘩売ってんのはこいつだ。」

「ハア… KAMEN RIDER…」

「 KAMEN RIDER!」

3人のデッキがベルトのバックルで回転し、戦闘アーマーが形成

されて、アレン、ドリュウ、グラントが、ドラゴンナイト、トルク、キヤモに姿を変える。

「アアアアアッ！」

グラントが雄叫びをあげて二人に襲いかかった。アレンもドリュウも拳を振るつたが、グラントは慣れた様子でそれをさばき、カウンターを叩き込んでいく。が、少しばかり型にはまっている感がないでもない。アレンは、彼が格闘家であると直感で分かった。

「口ほどにもねえな！」

「どうかな！」

ドリュウは素早くカードを抜き、マグナビザーに挿入する。

『STRIKE VENT』

『GUARD VENT』

マグナビザの頭を模した武器ギガホーンと、膝を模した盾ギガテクターが飛来し、ドリュウの右腕にと肩にそれぞれセットされる。

「どらあ！」

ギガホーンと叩きつけられ、グラントが体勢を崩した。が、ローリングして起き上がり、彼もカードを抜く。そうして、左足の召喚機バイオバイザーのカードキャッチャーを伸ばしてカードをセットし、手を離してワイヤーが巻き戻されるとカードが挿入される。

『HOLD VENT』

ヨーヨーの様な武器、バイオウィンダーが、グラントの掌に飛び込む。

「ああもう！」

アレンも見かね、ドラグバイザーを開いた。

『SWORD VENT』

アレンの手に、ドラグソードが飛び込む。それを振りかざしてグラントに切りかかるが、グラントはバイオウィンダーをぶつけて牽制すると、もう一度伸ばしてアレンの腕を絡め取った。

「なっ！」

と、ドリュウがギガホーンを構え、2本の角の間に取り付けられ

たレーザー砲を発射した。が、グラントは腕を振ってアレンをその軌道上に持つてくると、身を守る盾代わりにした。

「おわあ！」

「へっ、大したことねえな。でもウイングナイトを見失った。今回はお預けにしてやる。」

それだけ言うと、グラントは新たなカードを挿入した。

『CLEAR VENT』

瞬間、グラントが姿を消した。透明化したのだ。そして、アレンとドリユーに蹴りを見舞って、そのまま去っていった。

『FINAL VENT』

エミリアが駆け付けると、レンが飛翔斬を見舞ってアビスラッシュを粉碎していたところだった。そして、レンは変身を解いた。

「ねえ、待ってよ。あんた、確か……」

「レンだ。」

エミリアは、まず説明を求めた。

「ここはどこなの？何で誰もいないの？」

「……ここはベントラ、俺の国だ。人々はみんな……ゼイビアックスに拉致された。」

エミリアは、やはりレンを質問攻めにする。分からない事だらけだった。

「拉致されたって……解放できないの？」

「元のライダーは俺を除いてリーダーごと全滅した。だから俺が戦っているんだ。」

「…アレンはあんたがゼイビアックスの手先だって…」

「アレンは、ゼイビアックスの手先に騙されている。何とかして、真実を伝えないと。」

「逃がしたじゃないか！お前のせいだ！」

「アイツも味方だろ！？」

アレンが、いら立つドリユーに声をかける。

「バカは考えんな！ウイングナイトもいない！今日二つもしくじりやがって！この間抜け！」

そう言っ走り去っていったドリユーを、アレンは追った。

その光景を、ゼイビアックスはみていた。

「仮面ライダー…」よ、トルクとキヤモが同仕打ちを始めた。

狙いはウイングナイトだ。仮面ライダートラストを呼べ！」

そのライダーは、ゆっくりうなずいた。

突然、レンの後ろから攻撃が来た。みると、サイの様な見た目の重厚なフォームのライダーがいた。そのライダーは、いましがたの攻撃でレンの手を離れたデッキに足を乗せ、レンをじっと見据えた。「君は隠れている。」



レンはエミリアに言うと、その体を近くの車の車体に突き飛ばした。エミリアはそこにしたたかに背中をぶつける。

「何すんのよ!」

「悪い。」

レンはエミリアの体を押した。と、その体が吸い込まれるように消え、グラールに姿を現した。

そして、レンは身構えた。

と、そのライダー　仮面ライダートラストはデッキを蹴ってレンに返した。

「?」

レンが、怪訝そうな顔をする。

「拾うんだ、フェアな勝負をしろ。」

レンはデッキを構え、変身した。

「KAMEN RIDER!」

そして、変身したレンは、ダークバイザーを抜いてトラストに切りかかり、トラストも飛びかかって行った。

## 第11話 仮面ライダーキャモ（後書き）

### 次回予告

レンに襲いかかった仮面ライダー、トラスト。その目的は『バトルクラブ選手権大会』に優勝する事だという。彼も、ゼイビアックスにだまされたライダーの一人なのか。そして、アレンはキャモと再び遭遇し、やがて真実を悟るが…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『仮面ライダートラスト』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## ライダーデータ紹介 PART 2 (前書き)

新しいライダーが3人出てきたので紹介します。

この作品はライダーをユーブロンも含めて15人出す予定なので、3人登場することに紹介します。

## ライダーデータ紹介 PART 2

仮面ライダートルク

変身者：ドリユー・ランシング 日本名：ゾルダ

ベントラで開発された12のライダーのうち、射撃戦に特化したタイプのライダー。アドベントビーストは鋼の巨人『マグナギガ』。近接攻撃主体の他のライダーとは違い、複数の重火器を使い分けて遠距離から攻撃するタイプ。おそらく、拠点制圧に特化したタイプのライダーなのであろう。1分間に最大120発のエネルギー弾を放つ大型拳銃型召喚機『マグナバイザー』の連続攻撃で敵を弱らせた後、大火力を込めた1撃で大ダメージを与える戦法を得意とする。名前の意味は『回転』。リボルバー拳銃のマガジンやガトリングガンの銃身をイメージしたものと思われる。

シュートベント AP：2000（100t）

マグナギガの両腕を模した手持ちのキャノン砲『ギガランチャー』を召喚。100キロメートルの射程距離を誇り、並のモンスターならこの火器の1撃で粉碎できるが、その威力に比例して反動も大きいため、発射すると反動で大きく後退してしまう。

ランチベント AP：3000（150t）

マグナギガの脚部を模した2門の大砲『ギガキャノン』を召喚。射程距離は普通に目視できる敵に対して使用できる程度だが、2門合わせて発射すればギガランチャーの1.5倍の破壊力を誇り、また、シオルダーキャノンタイプであるため、マグナバイザーやギガランチャーなどと併用も可能。龍騎ではシュートベントだった。ちなみにランチの意味は『発射』で、昼メシではない。

ガードベント

1：マグナギガの胸部装甲を模した盾『ギガアーマー』を召喚。盾としてだけでなく、ギガキャノンと合わせて使う事で反動軽減に活用も可能。 3000GP

2：マグナギガの膝を模した盾『ギガテクター』を召喚、肩や腕に装着して使用する。原作未登場。 1000GP

ストライクベント AP：2000（100t）

マグナギガの頭部を模した武器『ギガホーン』を召喚し、右腕にセットする。2本の角での打撃攻撃の他、取りつけられたレーザー砲で遠距離攻撃も可能。原作未登場。

アタックベント AP：6000

マグナギガを召喚。自分の意思で動く事はほとんどないため、その頑丈なボディをガードベント代わりに使われる事もある。

ファイナルベント AP：7000（350t）

『エンドオブワールド』。マグナギガの背中のソケットにマグナバイザーを装着するとその体に取り付けられた火器がすべて展開、引き金を引く事でミサイルやレーザーを一斉射し、点ではなく面で敵を焼き払う。全ファイナルベントの中で最大級の攻撃範囲を誇り、一点集中で発射することも可能だが、発動から発射までの隙が大きいため、ここぞという時にしか使われない。

仮面ライダーキヤモ

変身者：グラント・ステイリー 日本名：ベルデ

ベントラで開発された12人のライダーのうち、カムフラージュ

戦法を得意としたライダー。ただしグラントが真つ向勝負でたたきのめす戦法を得意とするため、これらの能力はあまり生かされなかった。アドベントビーストはカメレオン型の『バイオグリーザ』だが劇中未登場。本体の格闘能力はそれなりに高く、真つ向勝負でも十分威力がある。だがその真価はアドベントカードによる変装やカモフラージュで発揮される。召喚機はカメレオンの様な形をした、左太腿の『バイオバイザー』。ワイヤーで本体とつながったカードキャッチャーがあり、それにカードをセットしたのち、カードキャッチャーを離すとカードが挿入され、効果が発揮される。名前の意味は『迷彩模様』。また原作では、全ライダーの中で、キャモのみ全てのシーンが新規撮影である。

ホールドベント AP:2000(100t)

バイオグリーザの目を模したヨーヨー状の武器『バイオワインダー』を召喚。そのままぶつけて攻撃に使うだけでなく、敵を絡め取ったりもできる。

コピーベント

相手の姿や武器をそのまま複製するカード。ただし、ほかのカードを使うと解ける。劇中未登場。

クリアーベント

使用者を完全に透明化するカード。本来は奇襲や騙し討ちに使うものだが、グラントは戦場から撤収する際に使用。

アタックベント

バイオグリーザを召喚するカードだが劇中未登場。

ファイナルベント AP:5000(250t)

『デスバニツシュ』。バイオグリーザが舌をキャモの足に巻きつ

けると、キヤモが振り子運動の要領で敵を捉えて空中に舞い上がり、パイルドライバーの要領で敵の頭を地面に叩きつける大技。原作未登場だが、龍騎では仮面ライダーライアと、仮面ライダーナイトを葬った。

仮面ライダートラスト

変身者：ブラッド・バレット 日本名：ガイ

ベントラで開発された12人のライダーのうち一人で、突撃戦法型。アドベントビーストはサイ型の『メタルガラス』。装甲車のような重厚な見た目とは裏腹にその動きは軽快で、ライダーの中でも随一のパワーを誇る猪突猛進型なため、フェアな真つ向勝負を好むブラッドとは相性がいいと言える。防御力も非常に高く、ベントラでは切り込み隊長だったのではないかと思われる。召喚機は左肩に取り付けられたショルダーアーマー型の『メタルバイザー』で、取り付けられた角は攻撃にも転用可能。名前の意味は『突っ込む』のだが、辞書によれば読み方は『スラスト』なので、もう別の単語になっている。

ストライクベント AP：2000（100t）

メタルガラスの頭部を模した手甲型の武器『メタルホーン』を召喚。鋼鉄をもやすやすと貫く貫通力を持つが、大きく重いためトラスト以外の使用は困難。

コンファインベント

他のライダーが使用したアドベントカードの効果を無効化する特殊なカード。内部からの裏切り者に備えたカードと思われる。

アタックベント AP：4000

メタルガラスを召喚。性格が性格だけに、インサイザーよろしく

共闘、と言つ訳にはいかない。

ファイナルベント AP:5000

『ヘビープレッシャー』。メタルガラスの肩に乗り、メタルホーンを構えて突進する。スピードと重量、そしてメタルホーンの威力が合わさり、爆発的な破壊力を生み出す。



## 第12話 仮面ライダートラスト

トラストとレンは、ほぼ互角に渡り合っていた。拳を交えるレンは、少し焦っていた。この目の前の相手が、予想以上にトラストの力を使いこなしていたからだ。

「ハア、やるじゃないか、1回戦からなかなか強敵じゃないか。」

「1回戦!? どういう事だ!?!」

レンの言葉など気にも留めず、トラストは襲いかかってきた。

「頑張つてレン!」

エミリアは、車体に映る二人の戦いを見守っていた。

その闘いを陰から見つめるライダーがいた。

蛇の様なヘルメットに、紫のボディ。その視線は、見守っているようにも、監視しているようにも、あるいはその両方にも見えた。

トラストはレンを車に押し付け、襟首をつかんで口を開いた。

「悪いな、君もいい選手だが優勝したい気持ちは私の方が上だ。」

「優勝!? 何の事だ!」

「バトルクラブ選手権に決まっている!」

レンは隙を見てトラストの胸に膝を打ち込み、後ろによるめかせてその隙に身を起こした。

「優勝? バトルクラブ? 何を言っている! これは遊びじゃない、戦争だ! 優勝などあり得ない!」

「私は必ず試練に勝つ。それがブラッド・バレットだ! …そして人生を取り戻す!」

そう言つて、ブラッド・バレットと名乗ったトラストはカードを抜き、左肩のシールドアーマー、メタルバイザーに投げ入れて力

バーを閉じた。

『STRIKE VENT』

サイの頭のような武器、メタルホーンが飛来し、トラストの手に飛び込む。それを振りかざしてレンに襲いかかった。続けざまに繰り出される攻撃を何とかかわし、身をひるがえして間合いを取る。

「だまされるな！カードデッキを渡した奴は俺を倒したいだけだ！大会なんてない！」

「私が優勝すると言っている！」

「お前は嵌められたんだ！何を約束されたか知らんが全部ウソだ！」

「そんなはず…そんなはずあるか！」

メタルホーンとダークバイザーはぶつかり合って火花を散らす。武器が、拳が、続けざまに繰り出され、レンとブラッド・バレットが一步も譲らずぶつかり合う。

グラールから見守るエミリア。と、不意に彼女の携帯ビジフォンが鳴り響いた。

『おいエミリア！シズルだ！クラウチさんが心配している！頼むから電話に出てくれ！』

「……………ああ…ゴメンシズル！今それどころじゃないの！」

エミリアは電話を切った。少し、申し訳なかった。

「…アレンに知らせなきゃ。分かってくれるかしら…？」

アレンの部屋。ドリユーは明らかにいら立っていた。

「そこに座れ。いいか？俺が言ったとおりにウイングナイトだけ狙ってればさっきのキヤモに邪魔されずに済んだんだ！」

「ああ悪かったさ！謝るよ！でも、何でキヤモはレンを狙ってるんだ？不思議じゃないか？狙われているのはお前じゃねえのか？」

「知るか！レンがデッキを独占しようとしたとかそんなところだろ！肝心なのは一つ、あいつは味方じゃない。味方しない奴は敵だ分

「かつたか！」

とその時、部屋のビジフォンが鳴った。アレンは立とうとするが、「出るな！話は終わってない！戦争なんだ余計な事は考えんな。」

「ああ……」

と、ビジフォンの音声で鳴り響いた。

『発信音の後メッセージをどうぞ。』

プーッ

『アレン！エミリアよ！レンが、装甲車みたいなライダーと戦ってる！あたしはホルテステイ郊外の資材置き場にいるわ！レンは敵じゃない救世主よ！ドリュウこそゼイビアックスの手下よ！アイツはあんたをだましてるの！お願い助けに来て！』

「……どうやら彼女も丸め込まれたらしいな。」

ドリュウが、表情を少しも崩さず言った。

「……アイツに限ってな。とにかくレンの居場所は分かった。けりをつけよう。」

「ああ。」

「まったく、どいつもこいつも俺の獲物を……」

グラントは、レンとブラッド・バレットの戦いを苛立たしげに見ていた。

と、そこにアレンとドリュウが歩いてきた。

「オイオイまた俺の獲物を横取りする気か？今度はぶちのめす。」

「オイ！喧嘩なんかしてる場合じゃねえだろ！俺達と一緒にゼイビ

アックスと戦おう！」

「ああ？ゼイビー？なんだって？アレは俺の獲物だ。二つの世界で最強になつてやる。」

「ちよつと、二つの世界とか最強とかなんの事だよ！これじゃインサイザーみたいじゃねえか……そうか、お前も騙されてるんだ！」  
が、二人は構わずデツキを構える。

「オイオイちよつと待て！」

「KAMEN RIDER！」

二人がそれぞれデツキを挿入し、トルクとキヤモへと変身する。

「待つて待つて待つて！そんな！」

グラントがドリユーに襲いかかり、拳を次々繰り出した。

「ホオワアツ！ホオツ！アアアツ！」

マグナバイザーを構えるドリユーを、グラントは素早い動きで翻弄する。そして資材の積まれたタナの間に入り込み、ドリユーを挑発する。

「へへッ、鬼さんこちらアエッへッへッヒュ〜」

「チイッ！」

「オオオオオオウ、オウオウオウオウオウオウ！」

打ちこまれるエネルギー弾を次々かわし、グラントが楽しげに走つていく。

ドリユーが柵の正面に来た時、飛びあがったグラントが蹴りを見舞う。

「何処見てるんだよ！」

『HOLD VENT』

「オオオオオオオリアアアアアアアアアアア！」

バイオワインダーが投げつけられ、ドリユーに命中して腕を絡め取る。転倒したドリユーの後ろに回り込んで蹴りを見舞うと、グラントはまた地形に消えて行った。

一方、レンとブラッド・バレットの戦いも激しさを増していた。と、ブラッド・バレットが不意に横を見やる。その視線の先にはドリユーとグラントがいた。

「他の選手も頑張っているようだ。」

それだけ言つて、ブラッド・バレットは襲ってきた。

「ハア…ハア…ぐツ…」

グラントが、腕を抱え、足を引きずっていた。どうやら、さっきのエネルギー弾は全部が外れたのではなさそうだ。と、いきなりアレンがその目の前に現れた。

「おうお前か…」

「ちよつちよつちよつ、待つてくれ！」

アレンが、両手を出して制止した。

「変身しないと後悔することになるぞ。」

「頼むから話を聞いてくれ、お前を雇ったのは人間じゃねえ！」

「人間じゃない？構わねえさ、戦えれば何でもいい。こんなパワー初めてだ。」

「グラールが滅んでもいいってのか!？」

「うるせえな。」

と、いきなりドリユーの声がした。

「そこで何やってる？俺抜きで内緒話か？」

「ドリユー、話を聞いてくれ、ゼイビアクスはライダーをだましてる！それぞれ、夢を叶えると言つて！インサイザーには、ウイ



「あ……ウアアアアアア！ワアアアアアアアアアアアアアア  
アアア……！！！！！！」

レンと、ブラッド・バレットもそれを目撃した。

そして、立ちあがったグラントの体が、揺らめいて消えていく。  
ベントが、始まったのだ。

「あ……うあ……何だ……これは……？あああ……何なんだよお！？オイ  
オイオイオイオイオイ！うああ嫌だ！うああアアアアアアア  
アアアアアアア！嫌だアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアア！……」

グラントの体が、完全に消えた。彼の存在していたのを証明して  
いたのは、そこに落ちていたカードデッキのみだった。

「オイ……どういう事だ……彼は何処に消えた……何が起こった？質問に  
答える彼に何があった！？」

グラントの最後を見たブラッド・バレットが、レンに問いかけた。

「……アイツは負けたんだ。」

レンの答えは、短かった。

「……聞いてないぞ。負けたら粉々になるなんて聞いてない！」  
それだけ言い残して、ブラッド・バレットはその場を後にした。

「信じた俺がバカだった！」

ドリュウは、自分を指さすアレンに、エネルギー弾を見舞った。

「グアアッ！」

「ハッハッハ！もう信じなくていい。もう、永遠にな。」

レンはその光景を見ながら、ゆっくりカードを抜いた。  
「…こっちの番だ…」

「辛いのは分かる。信じてたやつに裏切られたんだからな。」  
と、その時、電子音が轟いた。

『FINAL VENT』

「おおあああああつ！」

「なああつ！」

ドリユーは身をかわしていたが、飛翔斬のダメージまではかわせなかった。

「あ…やったあ！やったやったあ！」

エミリアは、その光景を見て思わず叫んでいた。

ドリユーがよろめきながら去って行った直後、レンはその場に倒れこんだ。どうやら、かなり消耗しているようだ。

「レン！大丈夫？」

「あ、ああ…」

物陰から、ゼイビックスがそれを監視していた。蛇のライダーは、何処に行ったか影も形もない。

「…ウイングナイトに弱点が生まれた。そうだろうか？」



エミリアの前にある車から、アレンに担がれてレンが出てきた。

「本当にごめん！お前を信じるべきだったのに……」

「…遅すぎはしないさ……」

エミリアが、そこに駆け寄った。

「レン！大丈夫！？病院に行った方が……」

「いや、射止めにふれさせたくないからやめとこつ。」

「せめて家まで送るよ！」

「家が…俺に家は無い……」

「ウチに来ればいい。」

アレンが、口を開いた。

「守るべきものが出来た…それが、ウイングナイトの、運の、尽き  
だ……」

## 第12話 仮面ライダートラスト（後書き）

### 次回予告

アレンの部屋へと担ぎ込まれたレン。そこで彼が話したのは、どうしてゼイビアクスが選んだのが、リッチーやグラント、ドリユーと言った人々なのかだった。

そして、敗者はベントされる事を知ったブラッドはしかし、それでもキャリアを取り戻すために戦う事を選んだ……

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『バトルクラブ』

命をかけて、守りたいものがありますか？

### 第13話 バトルクラブ

どこかの空き地に止められた車。その車体から、装甲車の様なライダーが出てきた。

「はぁッ…はぁッ…はぁッ…」

ブラッドだった。変身を解いた彼はバイクに跨ったが、発車はせず、トラストのデッキと見つめていた。

そして彼は、自分がレーサーとしての栄光の中にいた、最後のレースを思い出していた…

モトクロス会場。何台ものバイクとレーサーがいるその場に、ブラッドもいた。

【ゲートで合図を待ちます……さぁスタートです！】  
スタートの合図とともに、そこにいたレーサーがバイクを走らせる。

【1番手はブラッド！ブラッド・バレットがリードしています！そのすぐ後ろにはジョン・ステイブンス！】

ジョン・ステイブンスはブラッドの友人であり、ともに競い合う良きライバルだった。彼らの実力はかなり拮抗していた。だからこそ、二人も、そしてそれを見る観客もわくわくさせられていたのだ。

【現在、先頭はブラッド・バレットとジョン・ステイブンスの競り合いです！第3ターンでもほぼ差はありません！さぁどうなるブラッド・バレット？連勝記録を守るか！？この試練に勝てるのか

あ!?!】

と、その時だった。ジョンのバイクが突然傾くと、転倒した。コースの端だったから引かれる事は無かったが、これでブラッドは完全に彼との間を開いた。

【なんと！ジョン・ステイーンブンス転倒！ブラッド・バレットがリード！ここでチェッカーフラッグが振られます！ブラッド・バレット、連勝記録を伸ばしました！流石は試練に勝つ男ブラッド・バレット！どんな試練にも勝って見せたあ！】

その少し後のことだった。

『私はやっていません!』

ブラッドがいらだたしげに声を上げる。相手は監督だった。

『誓います！正々堂々勝ったんです!』

と、監督は目の前のラップトップPCの画面をブラッドに向けた。そこでは、ブラッドのジャケットを着た男が、ジョンのバイクをいじくりまわしていた。

『じゃあこれは？ジョンがコントロールを失っていないければ、お前は2位だった。』

『私じゃない!』

『お前のジャケットだな。ジョンは死ぬところだった。』

ブラッドには本当に身に覚えがなかった。認めることなど出来るわけがない。

『ジョーは親友です。傷付けることなどあり得ない!』

『勝ちにこだわるのはいい。だが今回はやはりやり過ぎだ。トロフィーはやれない。賞金も返してもらおう。ジョーは訴えないと言っているが、俺は委員会に報告する。お前のレーサー人生は終わりだ。』

『ポール、そんな……』

ブラッドは認められなかった。病気や負傷ならまだ許容もできるが、こんな形で人生を絶たれるなどまっぴらごめんだった。

『私はやってません！』

『残念だよ。』

ポール監督は、もう考えを変える様子など無かった。

『……これは試練だ。必ず勝つ。』

それだけ言い、賞金の小切手をポール監督の眼前に叩きつけると、そのプレ・ハブの小屋を後にした。

と、外に出たブラッドは、薄代々のコートを着た男が自分に向かっていているのに気づいた。

『今日は試練に勝ったかねブラッドくん？』

『サインはお断りだ。』

『何があつたか聞いたよ。すべて失つたって？』

その言葉を聞いた瞬間、ブラッドの眼の色ががらりと変わった。

『何で知ってる！？』

『それはどうでもいい。重要なのは、これだ。』

そう言うと、その男は手にした防止の内側をブラッドに向けた。

そこに合った携帯ビジフォンには、先ほど見た、バイクをいじる男が映っていた。と、その男が振り返る。見知らぬ顔だった。

『私じゃない……これを何処で？』

男は答えなかった。

『さては嵌めたな……ビデオをよこせ！』

ブラッドが詰め寄ると、男は帽子を胸につけ、またブラッドに見せた。その中には何もなかった。ブラッドは、何となくこの男の目的を予想した。

『そうか……幾ら欲しい？』

『いやいやいや、金が欲しい訳じゃない。私はチャーリー・フェザーズ。バトルクラブ選手権大会に出てほしいんだ。ルールも、リン

グも、レフェリーもなしだ。優勝したら、ビデオを渡す。負けたら……おっと、負けるのは嫌いだったな。』

ブラッドは明らかにいら立っていた。

『私はレーザーだ。格闘家じゃない。』

『レーザーに返り咲く条件だ。』

『……分かった。ならまずあんたと格闘だ。』

『おおっと。』

と、その時だった。そこに止めてあった車の向こうから、緑のアーマーに身を包んだ装甲車の様な男が、空中前転宙返りをして飛びこんできた。トルクだ。

『……こけおどしだ。』

『まあ見ていたまえ。』

レッドミニオンが2体、現れた。トルクは軽く手首にスナップをつけ、レッドミニオンに向かっていった。

そこからは、一方的な展開だった。首を掴まれ、プレ・ハブに叩きつけられた1体が消滅し、飛びこんできたもう1体がエネルギー弾をゼロ距離で叩きこまれて消えていく。

『はッはッは、何度見ても楽しいよ。とにかく、大会に出る。あのパワーで戦え。』

『レーザーに戻るのか?』

ブラッドの意思が、わずかに変わってきているのが読み取れた。

『……戦え。優勝しろ。』

そして、チャーリーと名乗った男は、ポケットからあるものを取り出した。

カードデッキだった。サイの様なエンブレムが刻まれたデッキが、共鳴するような音を立てつつ白っぽい光を放つ。

『……勝てるかね?』

チャーリー　ゼイビックスはそう、問いかけた。

その瞬間、彼は『仮面ライダートラスト』となっていた……

リトルウイング事務所。クノーが見た限り、クラウチは少し焦っていた。

「エミリアは無事だ。あいつに何があったって言うんだ？ なにもある訳がねえ……よし、あと1時間だけ待って警察を呼ぼう。」

「……警察じゃ、役に立たないかもな。」

レンは、アレンとエミリアに担がれてアレンの部屋に入っていた。「ソファーへ。」

「……ありがとう。」

レンは二人に助けられ、ソファーに身を預ける。

「お前は命の恩人だよ。俺は疑ったのに。」

「お前は悪くないさ。ゼイビックスとトルクが共謀してお前を嵌めたんだ。」

「お父さんがどうこう、なんて言われたら、誰だって頭がいっぱいになるよ。元気だしなってアレン。」

レンとエミリアが、アレンにはげますような声をかけた。

「そうだけど…俺に人を見る目が無かったんだよ。あいつは最低な奴だ。……そう言えば、何でゼイビアックスはライダーを騙してるんだ？だって、凶悪な犯罪者でも探してデッキを手渡せば……その方が手っ取り早いじゃないか。」

アレンが問うたのは、彼が一番気になっていた事だった。

「そう言えばそうよ。何であの人たちなの？」

その時、レンは立ち上がって、一枚の写真を取り出し、二人に手渡した。二つ折りにされたその写真を開くと、そこに映っていたのは、レンと、そしてアレンとしか思えない若い男だった。笑顔を浮かべ、カメラに向いている。

「これが理由だ。」

「どういう事？これっていつ撮ったの！？」

「……覚えがない。」

「当然だ。映っているのはアダム。前のドラゴンナイトだ。」

レンは、そのアダムとか言う男を指さした。

「アレンに瓜二つじゃん！」

「ホントだ…でもどういう事なんだよ！？」

レンは二人から写真を受け取り、話し始めた。

「このグラールとベントラは、ちょうど鏡映しの関係なんだ。カードデッキは特定のDNAで作動する。同じDNAを持った人間が、グラールとベントラに1人ずついる。」

「…つまり、ゼイビアックスは変身する人を好き勝手に選べないってことだろ？」

「そうだ。」

「…だから人間の欲望を利用するのね。相手によって姿を使い分けて。そして、畏にかける。」

と、アレンが割って入る。

「でもそれだと変じゃないか？俺はデッキをもらってない。ウチの中で拾った。ゼイビアックスは関係ない。」

「無いわけがない。…絶対に。」



とその時だった。例の気配が、3人を襲った。レンは行こうとしたが、どうやらけがは思ったより重いようだ。

「無理するな！」

「……いいや……」

「俺が行く。お前はここで待ってる。」

「……なら、任せた。」

ブラッドは、不意に鳴り響いたビジフォンを取った。

「チャーリー、最高だな、バトルクラブは。最初は乗り気じゃなかったが、ハマったよ。」

「観客も喜んでるさ。」

「次の試合はいつだ？」

と、ブラッドは、アレンと同じものを感じ取った。

「……さあ試合だ。別のライダーと対戦してくる。」

「オイオイオイ、相手はウイングナイトだ！チケットはもう完売してるんだぞ？」

しかし、ブラッドはヘルメットをかぶると相棒に跨り、<sup>マッ</sup>アクセルを開いて走り抜けて行った。

「ブラッド！？……クソつ、人間どもは初めて作られた時から進化していないのか？」

アレンの相手は、レッドミニオンだった。しかし今回ののはかなり強い。おそらく、かなりの場数を踏んでいるのだろう。レッドミニオンが、背中のブーメランを振りかざし、アレンに切りつける。何とかかわしたが、すぐに次の一撃が襲いかかる。

が、その一撃は、届かなかった。いきなり腕を掴まれたレッドミニオンが、横に押し倒されたからだ。

そこにいたのは、トラストに変身したブラッドだった。

「ふっ、ライダーがいるのにモンスターの相手とはな。それでは選手権を勝ち進めないぞ。ゴングはもう既に鳴っている。」

「え？選手権って何だよ？」

とその時だった。倒れたレッドミニオンが、身を起こしていた。

「チツ、待つてる、こいつは私が始末する。」

ブラッドはデッキからカードを引き抜き、メタルバイザーに投げ入れて挿入した。<sup>ベントイン</sup>

『 STRIKE VENT 』

飛来したメタルバイザーがブラッドの腕に装着され、好かれたレッドミニオンが窓を突き破って吹っ飛んでいく。

「オイ！逃げたぞ！追わないと……」

「構うな。私はバトルクラブ選手権の選手だ。モンスターなど知らん。」

「どうかしてる！あいつらを何とかしないと罪のない人がまたさらわれるぞ！」

それだけ言い残して走り去ったアレンを、ブラッドはじっと見て

いた。  
「……何なんだ？」

ビルの非常階段、レッドミニオンとアレンはそこで戦っていたが、今はアレンが優勢だった。ドラグソードが何度も閃き、レッドミニオンが踊り場に吹っ飛ぶ。アレンはそれを見るや、カードを引き抜いて挿入した。

『FINAL VENT』

空中に飛び上がってキックの体勢を取ったアレンを、ドラグレッツダーが炎で押す。レッドミニオンは飛び退いて逃げようとしたが、間に合わなかった。ドラゴンライダーキックをまともに喰らい、その体が碎け散り、浮上したモンスターのエネルギーをドラグレッツダーが吸収する。

「ハア、いいじゃん。俺一人の方が向いてるかも。」

ゼイビアックスの要塞では、ゼイビアックスがいら立ちをあらわにしてドリュウーに話していた。

「大失態の意味が分かるかねドリュウー君！？君はキャモをベントし、ドラゴンナイトまで狙った！」

「事故です！」

「止める！言い訳は聞きたくない。キャモの事は見なかった事にしてやる、小物だったしな。だが、ウイングナイトを倒すまで、ドラゴンナイトには手を出すな！」

「どうして俺を信じてくれないんです！作戦のうちです！ドラゴンナイトを利用してウイングナイトを惑わしベントする。その手筈で

した。なのにキャモを送り込むなんてめっちゃくちゃだ！ひっかきまわしたのはあなたですからね！」

「……確かに。キャモを送り込む前に君がしくじるのを見届けるべきだった。」

「しくじりません！」

「だといいがな。私は君に目をかけてやっている。だが、もししくじれば、代わりの人間は山ほどいる。」

「俺はしくじりません！」

「なら、行って来い。仕事のじゃまだ。」

ドリュウは去っていった。と、その陰から、あるライダーが出てきた。暗闇に隠れ、その姿ははつきりしない。

「見ていたな？」

「ハイ、將軍。」

「分かっているな？」

「ハイ。奴を監視させます。」

エミリアがリトルウイング飛び込んだ時、そこにいた皆が驚いた。

「エミリア！お前ケータイ切っただろ！心配して何回電話したと思っ  
つてやがる！」

「ゴメン！アレンが大変な事になったから切るしかないと思っ  
て……」  
クラウチは小さくため息をついた。

「ハア、もういい。言え、お前は無事だった。そして反省してます

とな。」

「ゴメンおっさん。あたしは無事よ。とっても反省してる。」  
「よし、もう行け。」

エミリアは、自分の部屋に行くところで、見覚えのある人影を見た。黄色基調の民族衣装に身を包み、バンダナを締めている…

「ユート!?!」

「よお、エミリア。今、話せるか?出来ればアレン達も呼んでほしい。見せたいものがあるんだ。」

「え?あ、うん。デ・マエでも取ろうか?」

「僕が買ってくるよ。お前さえよかったら。」

未確認疾患センターに、アレンは訪れていた。フランクの病室に入ると、彼は車いすに座ってこつちを見ていた。

「父さん、元気か?」

が、フランクは答えなかった。

「……」。一つ分かったと思うと、別の謎が出てくる。カードデッキを俺に渡したのは父さん?ゼイビアックス?わけがわかんねえよ……レンは治療法は無いって言うし……」

と、フランクがこちらを向いた。

「治療法はある、アレン。」

その声は少し、響くような感じだった。幻か何かかもしれない。

「お前は思い違いをしてるんだ。」

「!?!?…それってどういう事だよ!?!?」

が、フランクは、再び黙りこんでいた。

と、いきなりアレンのビジフォンの着メロが鳴り響いた。

「あ、もしもし?」

エミリアだった。

『もしもしアレン?ユートが帰ってきたんだけど、あんたを呼んでる。レンも一緒に読んで、あたしの部屋に来て。』

「あ、ああ…」

アレンは、フランクに言葉をかけると、そこを去った。

「また来るよ。治療法は必ず見つけるから!」

アレンとレンは、エミリアの部屋に入った。と、レンが、ユートをみるやカードデッキを構えた。

「!?!?何故お前がここにいる!?!?」

「何だ!?!?」

「裏切り者!よくもおめおめと俺の前に姿を現したな!」

アレンは、変身しようとするレンを何とかして取り押さえた。

「何なんだよ!?!?こいつはユート・ユン・ユンカーズ!俺の仲間だ

!」

すると、レンは静まったようだ。

「……そうか、すまない。彼は、仮面ライダーストライクに瓜二つなんだ。」

と、エミリアが明らかに驚いた様子を見せた。アレンにしたってそうだ。

「え！？ストライクって、ベンタラを裏切ったって言う！？」

「じゃあ、ストライクとDNAが同じなのはユートなのか！？」

「3人とも、何の話をしてるんだ！」

「すまない、知り合いと間違えてな。」

それから、アレン、レン、エミリアの3人は、ユートと向き合っていた。エミリアの手には、線のようなバイザーをもった、エイの様なライダーの写真が握られていた。

「これは？」

「ここに来る途中、クライスってやつから受け取ったんだ。がーであんずのさーばーをはつくして拾った奴で、めーるで送れるしろものじゃないから、渡してくれって。」

「でもこれって…何だ？」

アレンには、これが何かは何となくしかわからなかった。

「がーであんずにも分からないって。ただ、これは全部、先月にグラマシー地区ってとこで撮られたって。」

「グラマシー地区で？」

「彼が現れてから、このあたりから失踪者が出てないんだ。」

すると、いきなりレンが口をはさんだ。

「『彼』じゃない、『彼女』だ。この仮面ライダー、『ステイキング』は女性だ。」

エミリアは、少し顔を下げて呟いた。

「女の人のライダーもいたんだ……」

「とにかく、こいつはバケモノと戦ってるらしい。近いうちにまた情報が送られるかもって。あ、それと、もう一つ。」

ユートは腰につけたポーチから、何かを取り出した。

紫色のカードデッキだった。コブラのような紋章が刻まれている。

「ストライクのカードデッキ!? これを何処で!?!」

ユートは語り始めた。

「デネブって名乗った男から貰ったんだ。これを使って、『ういんぐないと』に勝って、死んだお兄に認められるような男になりたくないか? って。でも、怪しかったから、そこから去ったふりをして陰から見ると、そいつが鎧みたいな姿になるのを見たんだ。なあ、あいつは何なんだ?」

説明を始めたのはエミリアだった。

「そいつはゼイビアックス将軍。グラールを狙ってる、宇宙人よ。アレンと、このレンは、仮面ライダーとしてゼイビアックスと戦ってるの。」

ユートは、少し黙ったが、また話した。

「……そうなのか……だったら、僕もそいつと戦うぞ! 皆の力になりたいんだ!」

とその時、そこにいた全員の頭の中に、あの音が響き渡った。

「これは!?!」

ユートが問いかける。

「入口が開いたんだ! 今回は俺が行く! トラストがいるかもしれない!」

アレンはそう言って部屋を後にしていった。

アレンがついた時、トラストが鳥賊イカの様なモンスター、バクラーケンの触手に捕らえられて地面に叩きつけられたところだった。

「!!! 待て!」

アレンは走り寄ってバクラーケンの頭をつかんだが、バクラーケンはすさまじい腕力で振り払うとアレンに触手を叩きつけた。ブラ



ツドとは言えば、余裕の体でカードを抜いていた。

「案の定ライダーが現れたな。」

「おわあっ!」

『STRIKE VENT』

「任せろ。」

メタルホーンが閃き、バクラーケンに重い連撃が叩き込まれる。

と、バクラーケンはいきなり触手を伸ばしてブラッドを捉え、引き寄せた。

「アアッ!……クツ!」

ブラッドはベルトに手を伸ばしてカードを抜き、メタルバイザー<sup>ベントイン</sup>に挿入した。

『FINAL VENT』

と、資材の山をブチまけて、サイの様なアドベントビースト、メタルガラスが突っ込み、バクラーケンに角を叩きつけて弾き飛ばす。

「お休みの時間だ!」

ブラッドはメタルガラスの前に来ると、飛びあがってその肩に乗り、メタルホーンを構える。メタルガラスはバクラーケンに向けて突進し、トラストな巨大な角の様に見えた。

「ウオオオオオオオオオオオオ!!!」

必殺の一撃『ヘビープレッシャー』が炸裂し、バクラーケンが砕け散った。アレンは物陰から姿を見せた。

「スツゲエや。」

「邪魔ものはいなくなった。君と話がしたい。バトルクラブについて教える!君もチャリーの一味か!」

「バトルクラブ!?チャリー!?何の事だよ!」

「とぼけるな!この前、あのライダーに何をした!」

ブラッドはいきなり襲ってきた。ふいに叩きこまれたメタルホーンを喰らい、アレンの体が大きくよるめく。続けての攻撃は身をかわして避けるが、ブラッドは敵意をむき出しにして迫ってきた。

「勘違いしてる!俺はあいつらの仲間じゃない!」

「話を逸らすな！」

ブラッドは親指を下に向け、飛びかかってきた。

### 第13話 バトルクラブ（後書き）

#### 次回予告

敗者はベントされる事を知ったブラッドは、真実を知るためにゼイビアックスに詰め寄るが、弱みを握られた彼は戦うしかなかった。そして、ユート仲間に加えたアレンは、ステイングと遭遇。しかし、ステイングはアレンを逮捕するといいい、襲いかかってきた。次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『勝利か消滅か』

命をかけて、守りたいものがありますか？

第14話 勝利か消滅か（前書き）

エイさん登場！

## 第14話 勝利が消滅か

「うわぁっ!」

振り下ろされたメタルホーンをまともに喰らい、アレンは後ろに吹っ飛ばされた。

「バトルクラブなんてものは存在しない!全部作り話だ!」

「作り話…?あくまでシラを切るつもりか!?」

突き出されたメタルホーンを何とかかわすが、先ほどのダメージが大き過ぎた。アレンはブラッドに寄りかかる姿勢になり、膝をついた。

「…もう戦うのはヤメだ…」

「騙し討ちする手には乗らない。」

ブラッドはアレンを蹴って仰向けにし、右腕を大きく引いてメタルホーンを突きたてようとした。

「…だから話を聞いてくれって…:… あぁもう!」

アレンがそのままの姿勢で変身を解く。するとブラッドもアーマーを外した。

「子供じゃないか…プロの集団と思ってた…」

「試合なんかじゃない、キャモを見ただろ!後失礼な事を言うな俺は20だ!」

いら立つアレンにブラッドは問いかけた。

「彼はどうなったんだ?」

「ベントされた。アドベント空間にね。」

「何空間?」

「二つの世界の狭間にある空間だ。一度ベントされたら、もう戻れない。」

「ウイングナイトが行ってた。戦争だった。」

「ああそうさ!だけど俺は敵じゃない!」

と、ブラッドはそこまで聞いてから背を向けて去ろうとした。

「何処へ行くんだ話は終わってない！」  
「チャーリーに会わないと。」

「レン！あのライダーに会った。」  
「が、レンは眠っていた。」

「……………どうしてうまくいかないんだ……………」  
とその時だった。

「アレン、何があった。」  
「フランクがいた。」

「！？……………なあ、ゼイビックスにだまされてる人に真実を知らせたいのに……………どうすればいい……………」

「アレン、それが真実とどうしていい切れる？」  
アレンは少しレンの方を振り返った。と、前を向いた時、もうフランクの姿は無かった。

ブラッドは、携帯にさっきから何度もかけていた。

「チャーリー頼むから電話に出てくれ。」

仕方がないので、留守電を残しておく。

「チャーリー、ブラッドだ。電話が欲しい。」

とその時、ブラッドの背後から声がかけられた。

「ブラッド・バレットだな。」

振り返ると、そこにいたのはドリユーだった。口笛を少し吹きながら、持っていたトルクのデッキを見せる。

「バズーカ砲の奴だな？」

「仮面ライダートルクでもいい。なあ、ゼイビアックスはお前に何て言って近づいた？当ててやるのか。ウイングナイトを倒せば、どん底から助けてやるって言ったんだろ？」

「ゼイビアックス？」

「こいつをくれた奴だ。」

ドリユーは自分のデッキを見せた。

「チャーリー・フェザースか！でもどうして私なんだ！？ウイングナイトになんの恨みが…！」

「そんなのは関係ない。いいか？俺達がゼイビアックスを倒せば、戦争は終わる。お前はキャリアを取り戻し、俺は人生を取り戻す。」

「私はレーザーに戻りたいだけだ。」

「出来るさ。一緒にウイングナイトとゼイビアックスを倒そう。」

「…？ウイングナイトを？君たちは行ってる事がバラバラだ。もうおかしくなりそうだ！」

そして、ブラッドはドリユーのもとを去っていった。

「オイ！ぶっちゃけて話してやってんだぞ！一人じゃ棺桶から足を引っこ抜けねえぞ！ベントされたいのか！？」

「やった見つけた！ユートが伝えてくれた情報は本当だったのね！」  
エミリアは、パソコンの画面に映し出された新聞の写真を見ている。そこには、仮面ライダーステイキングの写真があった。記事の名前は、『謎の女戦士 グラマシー地区を守る』だった。

「何で出ないんだよ……」

いら立つブラッドの後ろから、いきなり声がかかった。

「もしもしブラッド君？」

ゼイビアックスだった。

「だましたな…お前はチャーリーじゃないし、バトルクラブなんてものも存在しない。」

ゼイビアックスは、そこに会った失踪者のポスターを指さした。



「ご明察。すべての件で私は有罪だ。」

「うそつき野郎、ただで済むと思うな。ズタズタに引き裂いてやる。」

「そいつは無理だ。君が濡れ衣を晴らす証拠は私が持つてるこれしかない。」

「別の方法を考えるさ。」

「えらいぞ、人間は考える葦だったか。だが君に選択肢は二つしかない。」

すると、ゼイビアックスはそこにあつたベンチに飛び乗り、鎧の様な戦闘形態に変身した。

「ベントするかされるかだ！」

グラマシー地区の公園をうろついていたエミリアは、不意に例の気配を感じ取った。

「!?!」

と、すぐ近くに、突然ステイングが姿を現した。そして、そこにいた烏賊イカのモンスター、ウィスクラーケンを鏡に蹴りこみ、自らもそこに飛び込んだ。エミリアはカメラを取り出して撮影したが、とれた画像を見ると、そこにステイングの姿は無かった。

「あつれ？遅かったかなあ…?」

と、すぐ近くにアレンが現れた。エミリアには気付かなかったらしく、デッキを構えて変身する。

「KAMEN RIDER!」

そして鏡に飛び込み、ウイスクラーケンに飛びかかった。  
「気をつけてアレン…危ない！」

少し離れたところ、バイクで走っていたレンの行く手を、ブラッドのマシンが塞いだ。

「さあ2回戦だ。」

「退け！キヤモがどうなったかみただろ！」

「ああ全部分かった。確かに私はゼイビアックスに嵌められた。だがそれでも、いいなりになるしかない。我々どちらかが消えるんだ。そしてそれはブラッド・バレットではない。」

「勝手にしろ！」

そして二人はデツキを向け合い、ベルトが形成される。

「KAMEN RIDER！」

スライド挿入されたデツキが回転し、二人の体にアーマーが形成される。そして、ウイングナイトとトラストは鏡の中に飛び込んで行った。

「こんなことはしたくなかったが、ほかに手が無い！」

「言い訳はするな！」

「ブラッド・バレットは試練に勝つ！」

ダークバイザーを構えたレンに斬られ、ブラッドの体が高架から

転落する。レンはそこに降り立ってダークバイザーを開き、カードを抜いて挿入した。

『SWORD VENT』

「行くぞ！」

レンはブラッドに斬りつけ、ブラッドは刀身を掴んでレンを押し戻そうとする。

「来い！」

「調子に乗るな！」

レンが斬りつけるが、ブラッドは素早くカードを抜いてメタルバイザーに挿入した。

『STRIKE VENT』

召喚されたメタルホーンで、ウイングランサーを受け止め、返す一撃でレンの体を吹っ飛ばす。

アレン達の方の戦いも、熾烈を極めていた。ウイスクラーケンは丸腰だったバクラーケンと違い槍で武装している。その攻撃を何とかかわし、飛びあがって壁を蹴るとウイスクラーケンに勢いをつけた拳を叩き込む。よろめいたウイスクラーケンに、アレンとステイングが蹴りを入れた。

「行くぞ！下がってる！」

『FINAL VENT』

ドラグレッダーが飛来し、アレンが飛びあがる。そして、ドラゴンライダーキックが炸裂し、ウイスクラーケンは碎け散った。

「ハア…ハア…ハア…お前は誰だ？」

「…私は仮面ライダーステイングだ。」

声から察するに、20代後半くらいの女性だ。

「ハア、ようやくまともなライダーに会えたよ。」

と、その時だった。

「パルム政府、グラール教団、モトウブローグス連合…三惑星最高機関の命により、貴方を逮捕する！」

「ええ？なんだって？」

「ハアッ！」

「あ、オイちよっと待てよ！」

## 第14話 勝利か消滅か（後書き）

### 次回予告

いきなり襲いかかってきたステイングの正体。それはナギサだった。変声機とステイングのアーマーで正体をごまかし、今まで戦っていたのだった。アレン達は説得しようとするが、レンがエイリアンだと思い込んでいるナギサは、考えを変えようとはしなかった……

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『仮面ライダーステイング』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第15話 仮面ライダーステイング

いきなり襲いかかってきたステイングの一撃を、アレンはかわしきれなかった。突き出された拳をまともに喰らい、盛大に体勢を崩す。

「のわあっ！」

ステイングはその隙にカードをデッキから抜き、左腕に取り付けた盾形召喚機エビルバイザー（ペントイン）に挿入する。

『S W I N G V E N T 』

エイの様なモンスターが飛来し、ステイングの手の中に大型の鞭、エビルウィップが飛びこむ。それを振って地面に叩きつけると、ステイングは飛びかかってきた。

「ハア！」

「ちよつと待てっ！」

アレンも素早くカードを抜いて、ドラグバイザー（ペントイン）に挿入した。

『G U A R D V E N T 』

2枚のドラグシールドが現れ、エビルウィップの一撃を何とかしのぐ。

「ああもう！まだるっこいなあ！」

そこから繰り出される攻撃をかわし、後ろに飛びのいて距離を取ると、ドラグシールドを捨ててアレンは変身を解いた。と、アレンはステイングがわずかに動揺しているのに気づいた。

「……アレン？」

「え？」

ステイングが変身を解く。ライトレッドのリングが現れ、アーマーとともに消滅すると、そこに立っていたのはナギサだった。

「ナギサ!？」

「驚いているのはこっちだ。なぜエイリアンに味方している!」

どうやら、ナギサはレンがエイリアンだと吹き込まれたらしい。

「…そうか。ナギサ、お前は騙されてる！」

「…いや、騙されているのは貴方の方だ。ウイングナイトはグラールを狙う者だ！」

ナギサを説得するのは、どうやらそう簡単ではなさそうだ。

「…とりあえず、話してくれないか。お前が、ライダーになった時の事を。」

「ああ…」

ナギサは語り始めた…

ナギサはレリクスにいた。ワイナールと、誕生日には必ず来よう

と約束していたあのレリクスである。

『…ワイナール、おかげさまで私は元気にやってるよ。』

『近況報告かねナギサ君？』

『誰だ！？』

ナギサが振り向いた先には、スーツとネクタイの男がいた。

『サイモンズ捜査官。太陽系警察の者だ。君はナギサ君だね？』

サイモンズと名乗った男は警察手帳を見せた。

『…そうだ。』

『単刀直入に言おう、君の力が必要なのだ。』

『どういう事だ？』

サイモンズは、懐からある物を取り出した。

ライトレッドのカードデッキだった。ナギサが手に取ると同時に白っぽい光を放つ。

『今、このグラールは異星人による侵略を受けている。君の仲間を想う心と、このカードデッキがあれば、奴らを滅ぼせる。』

『何故私なんだ？グラール銃見れば、私より強い者など掃いて捨てるほどいるだろうに。』

『我々が調査を行ったところ、適合率が最も高いのが君だったんだ。……友達を…ワイナール君が繋いでくれたグラールを…守りたくはないかね？』

『！？何故ワイナールの事を知っている！』

ナギサはナノトランサーから愛用の剣、スティールハーツを取り出してサイモンズの首筋につきつけた。

『こちらにはこちらの伝手があるのでな。グラールで起こった事の情報の大概は我々のもとに来る。それよりも、聞きたいのは君の答えだ。普段の生活に戻るか…友達を守るか。』

ナギサは、わずかに顔を下ろして、考えた。

『……分かった。要求は？』

『任務内容はすぐにこちらから伝える。…頼んだぞ。』

サイモンズ　ゼイビアックスは、期待しているような表情をし



て見せた。

『大切な人を守れるならそれは私の誇りだ。』

ナギサが決めた覚悟、それが彼女を『仮面ライダーステイング』  
にしていた…

「なるほどな…」

アレンは少し考えると、急にナギサの二の腕をつかんだ。

「行くぞナギサ！レンに会おう！」

「あ、ちよっと待て引っ張るな！」

その頃レンは、かなり一方的にブラッドを圧倒していた。続けざまにウイングランサーで斬撃を繰り出してメタルホーンを吹き飛ばし、更に一閃させてブラッドの体を弾き飛ばす。

「グアアッ！」

そしてレンはウイングランサーを倒れたブラッドの首に突き付け、ゆっくりと切っ先を引いた。

が、レンは止めを刺さなかった。刺せなかった。槍を持つ手が、小刻みに震える。

「……………くそっ！」

それだけいって、レンはその場を後にした。なぜ止めを刺さなかったのか、自分でも理解できなかった。

ゼイビアックスはその光景を要塞から監視していた。

「…厄介な事になったようだな。」

「せめて、変身者の事は伝えるべきじゃなかったんですか？」

ドリユーが相槌を打った瞬間、ゼイビアックスは彼に向き直った。

「一番の問題は、お前だ。…私を裏切ったな。」

「何を馬鹿な。何を証拠にそんな事？」

ゼイビアックスが、すぐ目の前のスクリーンに手をかざす。すると、そこに映し出されたのはブラッドに声をかけた時のドリユーだった。

『いいか？俺達がゼイビアックスを倒せば、戦争は終わる。』

ドリユーの表情は、一瞬で凍りついた。

「全部作戦のうちです！」

「悪い子には…お仕置きだ…！」

ドリユーは後ろに駆けだし、手近の鏡に飛び込んだ。ゼイビアックスは通信機を取り出し、起動させて叫んだ。

「仮面ライダー…！…！…！始末しろ！」

『…ありがたき幸せ。』

アレンの部屋では、アレン、レン、ユート、ナギサの4人がいた。  
「もう一度言うぞ。おねえさんは騙されてるんだ！ゼイビアックスが姿形を変えて、おねえさんにカードデッキを渡したんだ！」

「ゼイビアックスの方こそエイリアンなんだ。」

「奴は俺の星の人々を拉致し、次にグラールまで乗っ取る気だ！俺は奴と戦ってる。だから奴は俺にライダーをぶつけてるんだ！」

が、3人でなにを言ってもナギサは聞かなかった。

「サイモンズが言っていた。エイリアンはうそを吹き込んでくると。私は騙されない。任務を遂行する！」

アレンは少しいらだって言った。

「聞けって！奴はお前の望みを巧みに利用している！お前はグラールを守りたいんだろ？」

「そうだ！」

「だからゼイビアックスはお前に力を与えて、お前にグラールを守ってる気にさせたんだ！」

「全部嘘っぱちだ！目を覚まさないのなら、私が力づくで……」

「落ち着けおねえさん！」

ナギサがカードデッキに手をかけた時だった。扉をノックする音、エミリアの声があった。

「アレン、いる？エミリアよ。話があるの開けて。」

アレンは玄関に歩み寄り、エミリアを招き入れた。

「ゴメンエミリア、今はちょっとまズい……」

とその時だった。ナギサがテーブルの天板に飛び込んで逃げだしたのだ。

「マズイ！」

どうやらナギサはフローダーで逃げ出したらしい。足跡が無いのではユートもお手上げだ。

「別れて追いかけてよう！」

「わかった！」

アレンとレンはバイクに跨り、ユートは勘を頼りに追いかけた。

ナギサを発見したのはレンだった。廃工場の様な所にいた。

「戦う気はない。」

「私がグラールの盾になる！」

「止めておけ。」

が、ナギサはまったく効かず、カードデッキを出してベルトにスライド挿入した。

「KAMEN RIDER！」

ステイングに変身したナギサに、レンが歩み寄る。

「俺達と戦おう。」

が、ナギサはレンの体をけっ飛ばした。レンはうまく着地し、デッキを取り出した。

「KAMEN RIDER！」

レンも変身すると、ナギサが飛びかかってきた。数回の拳の応酬の後、二人はベンタラに飛び込んだ。

「ウイングナイトは、絶対に倒す！」

ベンタラのスタジアム、アドベントサイクルが2台やってきて、ウイングナイトとステイングが降り立った。レンはすぐさまカードベントインを挿入する。

『SWORD VENT』

するとナギサもカードを使った。

『COPY VENT』

ナギサの手に、レンと同じウイングランサーが飛び込んだ。それを振りかざして、二人は斬りあつた。

思い斬撃を受け止めたレンの体が大きく後退する。そこに飛び込んだナギサがさらに刃を一閃し、レンの体に直接ダメージを叩き込んだ。

「グアア！」

「ここまでだ！」

ナギサはデツキからエイの紋章エンブレムが刻まれたカードを抜き、エビルバイザーベントインに挿入した。

『FINAL VENT』

飛来したエイのモンスター、エビルダイバーの背中にナギサが飛び乗り、そのまま突撃の体勢に入る。が、レンが抜いたカードを間髪で使った。

『ATTACK VENT』

飛んできたダークウイングが、ナギサの体を弾き飛ばした。

「ぬあああ！」

吹っ飛んだナギサが地面に叩きつけられ、そこにウイングランサーを構えたレンが迫る。

「又・・・グウ・・・」

が、レンはそこで変身を解き、去っていった。

「……クソ……」

ブラッドは、自分の家で最後のレースのビデオを見ていた。脳裏に、様々な光景がよみがえる。

お前のレーサー人生は終わりだ。

さては嵌めたな…

君が濡れ衣を晴らす証拠は私が持っているこれしかない。

(ブラッド・バレットは試練に勝つ…)



君が選べる選択肢は二つしかない。

ベントするかされるかだ！

勝てるかね？

（ブラッド・バレットは試練に勝つ…ブラッド・バレットは試練に  
勝つ…）

そして、ブラッドはトラストのカードデッキを手に取った。  
「…ブラッド・バレットは試練に勝つ。」

## 第15話 仮面ライダーステイング（後書き）

### 次回予告

ブラッドは腹を括り、レンに再び戦いを挑む。ドリユーはアレンに助けを求めるが、アレンはそれを拒否し二人はぶつかり合った。

そしてナギサは、レンが自分に止めを刺さなかった事を考え疑問を募らせるのだった……

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『ハンティング』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第16話 ハンティング

エミリアは、アレンの部屋に飾ってある写真を見ていた。フランクと、幼いころのアレンと、彼の母と相思き女性が、カメラに向かって笑顔を浮かべている。と、アレンが戻ってきた。悔しげな表情を浮かべている。

「…ナギサに逃げられた。」

「でも、あのナギサが、ゼビアックスに進んで手を貸してるなんて思えないよ。」

「分かってる。彼女はレンがエイリアンで、俺とユートはレンにだまされてると思ってるんだ。ゼビアックスを完全に信じ切って、耳を貸してくれないんだ。ベントするのだけは、避けたい。」

「そんな…」

その時だった。二人の頭に共鳴のような音が響く。

「……きつとナギサだ。」

そう言っつて、アレンは部屋を後にした。

「アレン！待って！」

ナギサは、公園でサイモンズ　ゼビアックスに電話をかけていた。

「サイモンズ…ナギサだ。」

『ウイングナイトとドラゴンナイト、それと、ストライクに接触してきたようだな。』

「ああ。言った通り、たぶらかそうとしてきた。でも、ドラゴンナイトとストライクは、私の友達だったんだ……」

ナギサは、複雑な心境だった。倒すべき相手と思っていた3人のうち2人が、自分が守りたかった人だったのだ。

『そうか……彼らはグールより、富や権力を選んだんだ。奴らは人を巧みに操る。おそらく君には親しげにしてくるだろう。だが、ウイングナイト達に隙を見せたら、一巻の終わりだ。』

「ああ……理解している……」

『……ならばよろしい。』

「ああ……」

ナギサは電話を切り、少しうつむいた。

(でも私に止めを……刺さなかった。)

その時、彼女はアレンと同じものを感じ取った。

「行かないと……」

ナギサは素早く階段を駆け降りた。停めてあった自分のフロアダーに跨り、変声機の付いたヘッドギアをつけてヘルメットをかぶり、現場に向かう。

そこでは、女性が一人、三つ目の猿モンスター、デッドリマーに押さえつけられていた。

「キヤアアツ！ああああッ！」

とそこへ突っ込んできたアレンがストレートを見舞ってデッドリマーの体を弾き飛ばし、女性を庇った。

「大丈夫？」

「ええ……」

「さあ逃げて。」

女性が走り去ると、アレンはデッドリマーの方に向き直った。

「双眼鏡つてのはあるけど、お前のは3眼鏡？」

デッドリマーは背を向け、手近にあった窓に飛び込んだ。アレンもすぐに追いかける。

デッドリマーは近くのフェンスによじ登り、アレンの攻撃の手から逃れていた。が、すぐにアレンが飛びかかり、一人と1匹はもつれあつて向こう側の地面に着地する。そ、デッドリマーはいきなり背中から拳銃としか思えないものを取り出し、アレンの高周波エネルギー弾を浴びせ掛けた。何とかかわしたものの、デッドリマーは続けざまにエネルギー弾を放ち、接近する隙を与えない。アレンは狭い道に入った。デッドリマーもそれを追いかける。とそこに、電子音声が響く。

『SWORD VENT』

「こつちだ！」

デッドリマーの頭上にアレンがドラグソードを振りかざして飛びかかったが、デッドリマーは素早い動きでかわし、入り組んだ所に逃げ込むと、高台に上つてまた銃を構えた。

「またかよ!？」

打ちこまれたエネルギー弾を刀身で何とか防いだが、これでは接近すままならない。

「クッ！」

ひとしきり牽制射撃を終えて飛び降りたデッドリマーは、そこにアレンの姿が見当たらない事に気付いた。

アレンは近くの鉄骨につかまって姿を隠していた。後ろから飛びかかれたデッドリマーはもがいてアレンを振り払ったが、アレン

はすぐに間合いを詰めてサイドキックを見舞った。が、大したダメージにはなっていない。反撃の回し蹴りが炸裂し、アレンの体が地面を滑る。

「クツ…好き放題しゃがって、いい加減にしるよ!」

『FINAL VENT』

アレンは素早くカードを読み込ませ、地面を蹴って高く飛び上がった。弁解するように手を出すデッドリマーに、ドラゴンライダーキックが容赦なく叩き込まれ、その体が粉々に吹っ飛んだ。

アレンはその場で変身を解いた。と、そこにあつたパイプが1本、衝撃で外れた。

「あ、ごめん。」

シズルはリトルウイングに来ていた。近くにちょうどクノーがいる。

「クノーさん、エミリアはまだ戻ってきてないんですか?」

「まだだ。彼女に話でもあるのか?」

「彼女の趣味の事だ!のめり込み過ぎて完全におかしくなってる。鏡から出てきた仮面何とかの話と言い、モンスター騒ぎと言い、普通じゃない!」

すると、クノーが振り返った。

「普通でなければいけないのか?今まで普通じゃない人が世界を変

えてきたんだ。例えば、トムレイン博士とか。皆変わり者だ。エミリアだって今にきつと大物になるさ。」

「はあ…そもそもあなたに相談したのが間違いだったよ…」

シズルはため息をつく、その場を後にした。

ナギサを探してうろついていたアレンは、彼に向かって立っている、ドリュウを見た。懐のデッキに手を伸ばすアレンを、ドリュウは手を出して制する。

「戦う気はない！」

「へえ…俺が背中を向けるまで？」

「聞いてくれ。俺達には、ちよつとした誤解があつたようだ。」

「ちよつとした誤解？ふざけんな。ベントしようとしたくせにもう騙されない。」

「ゼイビアックスに騙されてたんだ。ウイングナイトが悪いと聞かされてた。」

「信じると思うか？」

「…俺も、ゼイビアックスに追われてる。俺達が力をあわさなくちゃ奴は倒せない！」

アレンは少し頷いた。

「へえ、そう言う事か。自分がボスを出し抜くのにしくじつたから、今更守ってくれて？断るね、身から出た錆だ。」

ドリュウはちよつとアレンの目をみると、懐に手を突っ込んだ。

「ああそうかい。言ってみただけだよ。敵は二人もいない、消えてもらう。」  
「やっぱりな。」

そこに駆け付けたエミリアは、鏡の向こうで、マグナバイザーのエネルギー弾をかわして走り回るアレンの姿を見つけた。

『GUARD VENT』

2枚のドラグシールドを構え、アレンがエネルギー弾をしのぐ。

「どうした！それで終わりか！」

「今のはほんの小手調べさ。」

ドリユーはデッキからカードを抜き、マグナバイザー（ベントイ）に挿入した。

『STRIKE VENT』

召喚されたギガホーンから、エネルギー弾が叩き込まれる。

「うわあっ！」

「へっへっへ。」

エミリアは、後ろから近づいてくる人間の気配に気づいた。

ナギサだった。近くにフローダーも停めてある。

「何する気!？」

ナギサは無言でエミリアの方を透かし、鏡を見る。そこでは、ドリユーがアレンを一方的に圧倒していた。

叩きつけられたギガホーンからエネルギー弾が発射され、アレンの体を大きく吹き飛ばす。

「サプライズ！」

続いてもう1発が、立ちあがりかけたアレンに叩きこまれた。

「ぐああっ！」

吹っ飛んで倒れたアレンは、地面にギガアーマーを据え、ギガラ



ンチャーの砲身をそこに乗せる、ドリユーを捉えた。

「ああ、今度はちよつと痛いぞ。」

ドリユーは余裕しゃくしゃくだった。

「アレンがエイリアンの味方だと本当に思う？」

「…いいや。」

「だったら、味方になってあげて。」

「何故味方と言える！」

ナギサはエミリアに詰め寄ったが、エミリアはひるまなかった。

「アイツはお父さんを助けただけなの。…本当のヒロインに、なつてよ…」

ドリユーがギガランチャーの狙いをつける前にアレンはカードを抜き、ドラグバイザー（ベントイン）に挿入した。

『STRIKE VENT』

飛来したドラグレッダーが、アレンの指示通り、ドリユーのいる方向に炎を吐く。ドリユーはギガランチャーを発射したが、炎に包まれて砲弾が爆発し、爆風をまともに喰らって弾き飛ばされる。

「うああああアアアッ！」

煙が消えると、ドリユーはすでに逃げてそこにはいなかった。

「…あ…何処に行った？」

その頃、現場に向かうレンのゆく手を、またもやブラッドが阻んだ。

「…俺達の対決は終わって無い。お前も腹を括ったか？」

「俺は使命を果たす。ライダーとしての使命を！」

「…俺もだ。」

そして、二人はそれぞれのマシンで駆け出した。

ドリユーは変身を解き、離れた所まで走って逃げていた。よろめきながら走り続けたドリユーは近くのパイプに寄りかかり、口を開いた。

「…何でだよ…こんなはずじゃ…王になれる筈だったのに…どこでしくじった…」

彼の脳裏によみがえる記憶。それは、彼が、小物の詐欺師から王にまでのし上がるチャンスをつかんだ日の事だった…

少し大きい、倉庫の様な建物。ドリユーはそこにある椅子にすわり、すぐ前のテーブルに置いてある、『商売用』のちゃんな携帯ビジフォンを手に取りながら電話をかけていた。

『ああ、今まさに大ヒットの商品だ。：オイオイ乗り遅れてんなあ、ネットくらい見るよ。：全世界で人気爆発だ。なんせこんな多機能なケータイ見た事無い。電話も、メールも、ネットも、メッセージングも、動画だって…』

が、その『商売用』ビジフォンは、開いた途端、蝶番が外れてカチャンと音を立てた。

『あ…：トランシーバーにだってなるんだぜ。：見た事無いって？人がすごいのだ。どこのディーラーも血眼になって探してるが、いくら金を積んだからって市場に無いものは無い。けど俺は、特別ルートで倉庫いっぱい買い占めた。』

そう言って、ドリユーはすっからかんの倉庫を見た。

『お前はダチだから斡旋してやる。1万台買えよ。全部でそうだな…：3千万メセタ。こんなうまい話2度とない…』

その時だった。一番近くの扉をガタガタとゆする音が聞こえた。  
『……ちよつとそのまま待つてくれ、秘書が呼んでるみたいだ。』  
そう言つてビジフォンを保留にしたドリユーは、ゆっくり、入口を見た。

ガーディアンズの制服としか思えないものを着た男が数人いるのを見た。

【ユニット75、直ちに現場に急行願います。】

【ユニット75、了解。】

【北側に回り込め。】

ドリユーは青ざめた顔で、『EXIT』と書かれたドアを見た。

『……ちよつと急用が出来ちまつたんで、細かい交渉ごとはやめにしよう。とりあえず200万メセタ送金してくれ。もう1万代でも何万台でも送るからさ。それじゃアな、よろしく。』

電話を切るが早いか、ドリユーは走り出した。素早く出口まで走り、扉を押しあけて自分のホイールバイクに跨りヘルメットをかぶる。が、その行く手を1台の車が阻んだ。

『クソっ！』

後部座席から、一人の男がやってきた。

ゼイビアックスだった。

『失礼、ドリユー君だね。』

『俺の名前はドリユーじゃない。誰かと間違えてるんじゃないか？』

『安心したまえ、ガーディアンズじゃない。実は、仕事の話を持ってきた。』

ゼイビアックスは襟を直しながら話を進めた。ドリユーはヘルメットを脱ぎ、ゼイビアックスの方を向いた。

『興味あるけど、今はちよつと都合が…』

『ほう。だったら、警察か、ガーディアンズでも呼ぶかな…』

ドリユーに、選択の自由は無いらしかった。ゼイビアックスは続ける。

『質問がある。君は人を意のままに操れると聞いたが、本当かね？』

『…報酬と、相談がある。』

『ある男たちを、戦つよう仕向けてほしい。成功したら、そうだな…君に世界をあげよう。』

『俺は砂漠で救命ボートを売れる。ちよろいもんさ。…だが世界？ちよつと話がでかすぎねえか？』

『んああ…分かりにくかったか、分かった。見せよう。私の力を。』  
ゼイビアックスは、車の車体に向かつてまつすぐ歩いた。と、黒光りする車体に、ゼイビアックスの体が吸い込まれるように消えた。そして、同じ場所から、スーツを着た腕が出てくる。その手にあった緑のカードデッキが、ドリユーに手渡されると同時に光と音を放つ。

『このデッキで…君は世界の王になれる…』

彼が、『仮面ライダートルク』となった時のことだった……

ドリユーは駆け出して行った。が、彼は、近くの捨てられたテレビの中から、彼を監視するライダーの視線に気づかなかった。

「……狩りの時間だ……」

そこからそう遠くないところ、光沢のある金属製の扉から出てきたアレンは、そのすぐ近くで、エミリアと、ナギサを見つけた。

「!? 何してる!」  
が。

「心配はない。貴方の言った事を考えていたんだ。」

ナギサはアレンを見返すと、穏やかな口調で話しかけた。

「……本当に?」

「うん。」

エミリアは、少し微笑んで返した。

その時、またもや気配がした。

「……あそこよ!」

そこから数段あがったところに、レッドミニオンがいた。1体だけ、と言う事は、前に行くわしたのと同じ、それなりに強い奴なのだろう。

「……アレン、一緒に戦おうと言ったら?」

ナギサの言葉に、アレンは少し戸惑ったが、すぐに笑みを浮かべて返した。

「…あ…ああ！そうしよう！」

走り出した二人を、エミリアは静かに見送った。

「さあ…やっつけて。」

ベントラに2台のアドベントサイクルが走って来る。止まった車体から出てきたのは、変身したアレンとナギサだった。

「何処行った？」

「さあ。」

と、振り返ったアレンは、後ろにレッドミニオンがいるのに気づいた。

「後ろ！」

と、そのレッドミニオンは腕からワイヤーの様なものを伸ばして上の足場にくっつけると、ターザンよろしく飛んできた。

「あ…いやだ！」

「アレン！ソードベントを頼む！」

「ああ！」

『SWORD VENT』

アレンがカードを挿入すると、ナギサもカードを使った。

『COPY VENT』

ナギサとアレンの手に、ドラグソードが飛び込む。ナギサが勇躍斬りかかったが、レッドミニオンはワイヤーを素早く縮めて上に上

がった。

「降りて私達と戦え！」

とその時、レッドミニオンが本当に降りてきた。振ってきたレッドミニオンをかわし、アレンが叫んだ。

「変な事言つなよ！」

「まさか本当に落ちてくるとは！」

レッドミニオンは背中に巨大手裏剣を出現させ、それを掴んで斬りかかってきた。二人は剣で防ぎ、カウンターを叩き込むが、レッドミニオンは身をかわして二人に順々に切りつけ、弾き飛ばした。続いて手裏剣を投げるが、それは何とかローリングしてかわす。

「危なかった……」

『STRIKE VENT』

アレンはカードを使い、ナギサもさつきと同じカードをエビルバイイザーに挿入した。

『COPY VENT』

アレンの手にドラグクローが飛び込むと、ナギサの手にも同じものが装着された。

「……行くぜ。」

「……ああ。」

「……はアアアアアア………でえやあッ！」

二人は同時にドラグクローを突き出し、ドラグレッダーはその数に合わせて二人分の炎を吐いた。そして、直撃を喰らったレッドミニオンが粉々に爆散した。

「ハア……やったな。」

「ああ。これからどうする？」

「ウイングナイトと、ユートに会いたい。私はどんな言葉より、貴方達の行動を信じる。」

「分かった。行こう。」



一方ユートは、ナギサを探してほうぼう走り回っていた。と、彼の目の前に、いきなりドリユーが飛び出した。

「おおっと！……お前、仮面ライダー・ストライクか？」

「だったらどうした。お前は誰だ。」

ドリユーは、持っていたカードデッキを出して見せた。

「！……ドリユー・ランシング……アレンを騙した奴か！」

「聞けつて！まずは話をしよう！」

「お前の話なんか聞かない！よくも僕の家族を騙したな……許さない……許さないぞ！このペテン師が！」

「言わせておけば……」

ドリユーとユートはそれぞれデッキを構えた。ドリユーのデッキからは緑の、ユートのデッキからは紫の電光が、それぞれの腰に伸び、ベルトを形作った。

「KAMEN RIDER！」

## 第16話 ハンティング（後書き）

### 次回予告

レンとブラッド、そしてユートとドリユーはそれぞれぶつかり合う。その場に駆け付けたアレンとナギサはレンに手を貸そうとするが、そこにドリユーのファイナルベントが叩き込まれる。しかし、そこでユートが予想もしなかった行動をとる…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『ケライス』

命をかけて、守りたいものがありますか？

第17話 クライス（前書き）

今回は時間ないので短いです。

## 第17話 クライス

ベントラの工場で、レンとブラッドがアドベントサイクルから降り、お互いに向き合った。

「あの場で俺をベントしておくべきだったな。代償を払ってもらおう。」

ブラッドの言葉とともに二人がそれぞれのカードを挿入した。

『SWORD VENT』

「…ブラッド・バレットは試練に勝つ。」

『STRIKE VENT』

そして、飛来したお互いに武器をかざしてお互いに突っ込んでいった。ウイングランサーが振り下ろされ、メタルホーンが重たい攻撃を繰り返す。

「フン！」

「くあっ！」

アレンとナギサ、そしてエミリアは、そこにつながる窓の前に来ていた。目の前で、レンとブラッドが激しい応酬を繰り返している。

「レンがいる……トラストも。」

「どうするっ？」

「任せろ、俺が話してくる。」

アレンは窓の前に立ち、デッキを構えた。エネルギーの流れが腰に伝わり、ベルトが形作られた。

「KAMEN RIDER！」

そして、ドラゴンナイトに変身したアレンは腕を下ろし、ナギサ

の方を見た。

「行くぞ。ナギサ、準備しろ。」

そして、窓にアレンが飛び込んだ直後、ナギサもカードデッキを取り出して窓の方に構えた。ライトレッドのエネルギー流がベルトを形成し、ナギサは掛け声とともにデッキをスライド挿入した。

「KAMRN RIDER!」

そして、スティングとなったナギサはエミリアに法を向いて小さく頷くと、アレンを追って窓に入った。それを見て、エミリアは満足げにほほ笑んだ。

「いいチームになるよ。きつと。」

『CONFAIN VENT』

レンが装着したウイングウォールが、突然消滅した。ブラッドが新しいカードを使ったのだ。

「トリックを使えるのはお前だけじゃない。行くぞ……ハアツ!」

と、突っ込んだブラッドの前に、アレンが割って入った

「止める!ゼイビアックスの思うつぼだ!」

「邪魔だ!」

ブラッドはメタルホーンをアレンに叩きつけた。腕で防いだが、ダメージをしのぎ切れずに横に倒れこむ。

「アレン!」

と、ブラッドの体に、コピーベントで複製されたウイングランサーが叩きつけられた。そして、ナギサも立ちはだかった。  
「フツ、3対1か。だがブラッド・バレットはもつと不利な試練にも勝ってきた！」

ドリユーとユートの戦いも熾烈さを増していた。マグナバイザーのエネルギー弾をユートがかわし、ローリングしてカードを抜くと、コブラの頭のような飾りが付いた杖型召喚機ベノバイザーベントインに挿入した。

『SWORD VENT』

螺旋状の刃を持った剣、ベノサーベルがユートの手に飛び込む。その刀身で光弾をしのぐと、横から一撃叩きつけてドリユーの体を吹っ飛ばした。

「…本当に騙し通せると思ってたのか？主人の裏をかいて。」

「まだやれるさ。お前らさえ倒せば!」

『SHOOT VENT』

召喚されたギガランチャーをドリユーが発射する。ユートは何とかわしたが、爆風でわずかに体勢を崩した。が、すぐにベノサーベルを構えなおして向かって行った。

「ぬん!」

ブラッドが振り下ろしたメタルホーンは、レンの体をまっすぐ捉えた。ナギサはかわしてカードを抜き、エビルバイザー（ベントイ）に挿入した。

『FINAL VENT』

が、ブラッドはさっきと同じカードを使った。

『CONFAIN VENT』

飛来したエビルダイバーが、消滅した。

「何?」

「悪いがヒラメ女史、ファイナルベントは使わせない!ハアツ!」

「ぬあっ!」

ブラッドがジャンプからのシールドータックルを見舞い、角を叩きつけられたナギサの体が大きく吹っ飛んだ。

「どんな手を使っても、試練には勝つ！」

『FINAL VENT』

「ナギサ！」

「私がやる！」

「下がってろ！」

ブラッドのヘビープレッシャーが叩き込まれる。が、その行く先に、アレンが立ちふさがった。

『GUARD VENT』

「グアアッ！」

勢いで弾き飛ばされたアレンに、レンとナギサが駆け寄った。

「大丈夫か？」

「ああ、何とか。……もう十分だ！ゼイビアクスのために戦って何になる！」

「ゼイビアクスは関係ない！もうこれはブラッド・バレットに闘いだ！」

アレンはブラッドの攻撃をかわし、その体を後ろから抑え込んだ。

「離せ！」

「いいぞアレン！」



クノーは、リトルウイングの事務所からエミリアに電話をかけた。

「エミリア、遅刻だ。」

「ああ…ゴメンクノーさん、今忙しくて。」

「……また仮面ライダーを追ってるのか。」

「すぐに行くよ！そっちに着いたら全部話すから。」

「ああ。でも急いでくれ。クラウチが騒いでる。」

「ええ。有難う。」

エミリアが電話を切った。そしてクノーは、ちょうど来た顧客の方へ向かった。

ユートは、すぐ後ろでアレンら3人とブラッドが戦っているのを見た。ナギサが、ユートの存在に気付く。

「ユート！」

「トルクはこっちで相手する！おねえさん達はトラストを何とかしてくれ！」

「ああ！」

ドリユーは落ち着いてカードを抜いた。

「ハッ、フルハウスだな。」

『ATTACK VENT』

地面から、生える様にマグナギガが現れた。

「だが、俺には最強のエースがいる。全員片付けてゼイビアックスの右腕に返り咲いてやる。」

『FINAL VENT』

マグナギガの全身に火器が展開する。ユートがアレン達の所へ飛び込んだ直後、その前身の火器が火を噴き、大爆発が巻き起こった。

「うああああッ！」

「又オオオオッ！」

「ゲラッ！」

爆発が収まった直後、ソリユーは笑いながら去っていった。

「ッハッハッハ！ちよっとやりすぎたかな？まいつか。」

アレンは、ブラッドが立っていたのを見た。が、どこか不自然だと、ブラッドが横に倒れ込んだ。後ろで首筋を掴んでいたユートが、彼を離したのだ。

「ハッ、ありがとう。盾になってくれて。」

口調が明らかに変わっている。何かがおかしい。何か。

「……ユート？」

「ぐッ…貴様…何を…」

「残念だよブラッドくん。やっぱり君は選手失格だったさ。」

ユートが、楽しむような口調でブラッドに声をかける。それは、

アレン達が知っているユートではなかった。

「……失格など、するかあ！」

ブラッドは怒りにまかせてユートに殴りかかったが、ユートは素早く懐に潜り込むとベノバイザーの剣のように細くなった先端を棍棒の様に叩きつけた。

「ハアッ！」

「グアア！」

吹っ飛ばされたブラッドが、壁に叩きつけられる。

「又ゲウッ！」

それを見て、ユートはカードを抜いた。それに刻まれていたのはコブラの紋章。エンブレム

「フッ。お前の悲鳴を聞いてみたい……」

『FINAL VENT』

後ろから、コブラの様なアドベントビースト、ベノスネーカーがのたうちながらやってきた。

「さあ、祭りの時間だ！」

ユートは両手を広げて助走をつけると飛びあがった。

「フンッ！」

空中でトンボを切ると、ベノスネーカーが鎌首をもたげる。

「ぐッ……マズイ……」

「でえやあああああああああッ！」

ユートが、ベノスネーカーの毒液に押される形でブラッドの方の突っ込みながら、バタ足の様に足を動かした。そして、連続キックがブラッドの体につけざまに叩き込まれる。

「オおおッ！うう……あああああッ！」

爆発が起こり、ブラッドがいた場所が炎に包まれる。そして、後ろに弾き飛ばされたブラッドの体が、削られるように消えていく。

「……ッ……俺は負けない……いつでも勝つ……ブラッド・バレットは……  
試練に……勝つんだ……あ……ブラ……ああ……」

ブラッドは消えた。最後までおのれの負けを認めず、消えた。

「ツはツはツはツは！ブラッド・バレットの華麗なフィニッシュでーす！」

「…どうしてだユート、説得すれば！」

アレンが怒りをあらわにして叫ぶと、ユートが酷薄な口調で答えた。

「お前達に協力したかもね。だからベントしたんだよ。ゼイビアックスのために。」

「どういう事だ…貴方は…まさか、裏切ったのか！？このグラールを！」

「ハア？裏切った？最初から君たちの側になんか付いちゃいないよ。」

とその時、レンが口を開く。

「…なるほどな。いつからだ。いつから芝居を打っていた。」

「そうだな…聖棺とやらが消えてから、3週間後くらいかな。」

「！？どういう事だよレン！」

「まだ分からないのか。こいつはユートじゃない。名前はクライスベントラのストライクだ。」

「そうだよ大正解。君達には、ハッカーのクライスって言った方が分かりやすいね。」

「…！エミリアにモンスターやライダーの情報をリークしてたやつだ！」

「そうゆう事。あれは保険だよ。ユートじゃないってばれたときのまさかレンがいるなんて想定外だったけどね。君達の内部事情は大体分かったから、こうして正体を出したってわけさ。今まで誰かが見るか持っと思うと一人の時でも要塞の外じゃおちおち素も出せやしなかったから大変だったよ。それじゃあね。君たちは後のお楽しみに取っておくよ。はツはツはツは！」

ユート　クライスは、鏡に入っていなくなった。アレンは、ただ見ていることしかできなかった。

## 第17話 クライス（後書き）

### 次回予告

正体をあらわにしたクライスは、ドリューをベントすべく戦いを挑む。そして、欺き、騙し続けたドリューはついに…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『悪魔の約束』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1608w/>

---

仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士

2011年10月3日03時25分発行